

島原市文化財調査報告書 第1集

# 大手浜遺跡調査報告

(島原市大手浜の砂丘遺跡)

1981年3月

島原市教育委員会



# 大手浜遺跡調査報告

(島原市大手浜の砂丘遺跡)

1981年3月

島原市教育委員会



## 発刊にあたって

昨今における急速な開発は、地域の近代化をもたらすとともに、  
他方、史跡、名勝、天然記念物及び自然景観の破壊を促進し、更に  
先人か残した貴重な生活様式が埋もれていると想われる埋蔵文化財  
を消滅させるなど、これら文化財の保存対策はきわめて急務のこと  
であります。

本市におきましても文化財の現状を把握し、その保護強化をはかる  
とともに、地域住民の文化財に対する理解と关心を深めるよう努  
めているところでございます。

本調査は、本市の大手浜総合利用計画をすすめるにあたって、大  
手浜遺跡、防波堤遺構、遠見番所跡の輪郭を明らかにし、その規模  
を知るとともに、存在の意義を確認しようとするため、調査報告書と  
してまとめたものであります。島原大変により石垣、遺構、遺物等  
が押し流され、原形回復には至っておりませんか、その働きを考え  
あわせた時、調査の意義は大きなものがあります。

この報告書が郷土の歴史を詳しく理解し、さらに文化財保護の一  
助として役立つよう願うものであります。

最後になりましたが本調査を担当していた島原市文化財保  
護審議委員占田正降、吉川安弘両氏並びに関係者各位に深く敬意を  
表します。

昭和 56 年 3 月

島原市教育長 平井 皎

# 本文目次

1 大手浜遺跡の概要	5
A. 遺跡地の地形変化 (第2図, 1, 2)	6
B. 遺物よりみた遺跡の文化年代 (図版第5~16図)	7
2 遺構	
A. 防波堤 (図版第1図)	9
B. 金戸山(金森山)周辺の石垣 (図版第2, 3図)	9
C. 金戸山(金森山) [図版第4図]	10
D. 石干見(すくい) [第1図8地点及び写真図参照]	10
3 各トレンチの状況 (第1, 4図, 図版第26図)	12
1トレンチ (第1図, 第4図-1, 2)	12
2トレンチ (第1図, 第4図-2, 3)	12
3トレンチ (第1図, 第4図-3)	12
4トレンチ (第1図, 第4図-4)	12
5トレンチ (第1図, 第4図-4)	12
6トレンチ (第1図, 第4図-5)	12
4 遺物 (図版第5図~第16図, 27図)	18
5 遺見番所と島原教会について (吉田安弘) ·	20
6 猪石 (島原の猪所在資料の一つとして) [第8, 第9図]	25
7 まとめ	27

## 挿 図 目 次

第1図 各トレンチ設定図	3
註 1 旧猛鳥神社所在地 2 イン熱（竜宮島） 3 旧建造物の所在を示す盛り土跡（第2図にある新大波戸） 4 別岡防波堤（百間波止）所在地 5 旧石組「石垣」を残すところ（橋跡か） 6 元「ナレ川」と呼ばれたといわれる。5同様石垣跡を残す。7 金戸山（金蔵山）遺見番所跡 8 石平見（すくい） 9 大手川旧川口、原図は島原市事業推進室作製提供	
第2図 1図 大手浜の地盤図 1 現在の堤防 島原市事業推進室提供	5
2図 寛政地変前後の島原の地図（長崎県土木部河川砂防課「眉山IS 48-6 より 原図は島原市中村氏所蔵）	6
第3図 大手浜埋立予定図（島原市事業推進室提供）	8
第4図 各トレンチ図	
1 1 トレンチ1～10	13
2 1 トレンチ11, 12 2 トレンチ1～8	14
3 2 トレンチ9～13 3 トレンチ1～5	14
4 4 トレンチ1～5 5 トレンチ1～5	15
5 6 トレンチ (古田, 小畠, 村田ハルエ(補助)作製)	16
第5図 大手浜遺跡全景（上・下統き）	17
第6図 発掘調査現場と背後の島原市街（東より西に向って）	18
第7図 金戸山（金蔵山）の全景（南西より）	19
第8図 島原鐵石写真	26
第9図 島原鐵石実測図	26

## 図 版 目 次

第1図 大手浜防波堤実測図（残存部）断面、斜度図附	31
第2図 金戸山南側残存石材実測図（A～B断面図）	33
第3図 金戸山西側残存石材実測図（C～D断面図）	35
第4図-1 金戸山実測図（古田実測）	37
- 2 金戸山各部地区の平均断面図（古田実測）	39
- 3 島原市の地形変化図（島原市事業推進室作製）	41
第5図 昭和31、32年採集土器実測図（A1, A2, A3, A5, 古田保 A4 錆取清氏保「S25-11出土」）古田実測	42
第6図 昭和31、32年採集土器実測図 （A25, A26, A27, A28古田採集 猛鳥神社保 A27 製埴土器） 小畠弘己火側製図 中尾ヨシエ補助	43
第7図 昭和31、32年採集遺物実測図 （A29, A30, A31, A32, A33古田採集 猛鳥神社保 A32 銅鏡片 A33 古銅釘 A31 組織底土器）小畠弘己火側製図 中尾ヨシエ補助	44
第8図 昭和31、32年採集土器実測図 （A11, A12, A13, A10, A17, A18, A24, A8, A9, A15, A16, A14, A23, A19, A21, A20, A22の各土器）古田実測	45
第9図 大手浜遺跡遺物実測図 （41, 67, 54, 32, 44, 45, 34, 42, 36, 436, 421, 219, 173, 273 133, 279の各遺物）古田実測	46
第10図 大手浜遺跡遺物実測図 （324, 344, 189, 93, 98, 460, 458, 457, 208, 201, 209, 207, 527, 44, 416, 415, 204, 100の各遺物）古田実測	47
第11図 大手浜遺跡遺物実測図 （62, 63, 46, 20, 40, 76, 47, 48, 72, 25の各遺物）古田実測	48
第12図 大手浜遺跡遺物実測図 （6, A7, 8, 9, 73, 31, 74, 27, 16, 75, 64, 69, 3, 1の 各遺物 A7 S31採集）古田実測	49
第13図 大手浜遺跡遺物実測図 （563, 476, 554, 423, 459, 428, 555, 268, 184, 278, 372 419, 304, 311の各遺物）古田実測	50
第14図 大手浜遺跡遺物実測図 （99, 69, 242, 248, 510, 537, 472, 246, 346, 323, 533, 420	51

181, 367, 476, 550の各遺物) 古田実測	
第15図 大手浜遺跡石器実測図	52
(A番号はS 31, 32年採集, A 1, A 2, A 3, A 4, A 5, A 6, A 7 9, 2, 24, 528, 427, 505, 161, 59, 527の各遺物) 古田実測	
第16図 大手浜遺跡遺物実測図	53
(329, 186, 58, 97, 496, 92, 210, 366, 320の各遺物) 古田実測	
第17図 大手浜海岸の干潮時(上)と満潮時近い頃の(下)同一干潟地 註 上は石千見(すくい)であるか現況は標高0メートル、一帯は干潮時は干潟となる。	55
第18図 遺跡地の風致地区指定の立札(上), 2トレンチより見た金戸山(中), 第1図8に示す石千見(すくい)(下)	56
第19図 金戸山(上, 片町新田より), 大潮時トレンチに湖が入る(1~3トレンチ) 大潮時湖を受ける大手浜遺跡(下)	56
第20図 旧防波堤(西より東に向って写す)	57
第21図 旧防波堤の状況(いずれも西から東に向って写す)	57
第22図 旧防波堤の状況(左は防波堤南側, 上右は北側, 「」はいずれも 東に向って) 下は北側「東より西に向って」	58
第23図 旧防波堤(上は北側の捨石の状況, 中は北側の基礎積の状況, 下は基礎の 積石で除去された状況)	59
第24図 金戸山の景(上 金戸山南側石垣の状況, 中 金戸山西側石垣崩壊の状況 下 金戸山南西隅より対岸に橋があったといわれる, その礎石 とみられる状況)	59
第25図 金戸山の石組(上 金戸山東側の二重石垣, 中 金戸山北側の登坂の状況 下 金戸山西南隅にみる積み土の状況)	60
第26図 トレンチ断面写真図	61
1 上 1t-1 (e) 下 1t-5 (e)	
2 上 1t-9, 中 1t-7 (上鉢, 磁器の出土状況) 下 1t-8	
3 上左 2t-10 (5層上部瓦の出土) 上右 2t-8 (4層磁器, 陶器6層瓦, 陶器の出土状況) 下左 2t-4 (陶器出土状況) 下右 2t-7 (3層下骨片と陶器の出土状況)	
4 上 2t-13 中 3t-2 下 3t-5	
5 上 4t-1 中 4t-3 下 4t-4	
6 上 5t-2 中 5t-4 下 6t	
第27図 遺物写真図	64
1 上 遺物集 中 上段左より329, 186, 505, 中段左より427, 59, 527	

- 下段左より 113, 58, 528, 161, 下 1.段左より 196, 198, 199, 186, 中段左より 200, 242, 197, 250, 251, 下段左より 264, 231, 252, 253, 254, 259, 230
- 2 上段左より A 2, A 5, A 1, 二段左より A 3, A 7, A 12, A 11, 三段左より A 20, A 23, A 10, 246, 248, 下段左より 181, 323(裏と表)
- 3 上段左より A 28, A 25, A 27, A 31(裏), 二段左より A 26, A 30, A 31(表), 下図 上段左より 113, 208, 54, 100 二段左より 209, 201 41, 178, 下 207
- 4 上段左より 97, 92, 496, 436, 173, 二段左より 113, 214, 273, 279, 三段左より 241, 424, 422, 423, 下段左より 425, No15, 184
- 5 上段左より 210, 267, 181, 207(組織痕土器) 476, 二段左より 491, 492, 481, 480, 三段左より 482, 483, 493, 494, 下段左より 483, 422, 423, 424, 425
- 6 上 1.段左より 490, 487, 488, 下 489, 中 1.段左より 51, 19, 62, 下段左より 74, 75, 76, 下 上段左より 63, 26, 下段左より 40, 46
- 7 上 上段左より 98, 458, 209, 527, 中段左より 457, 208, 416, 201 下段左より 415, 204, 44, 460, 中 1.段左より 278, 554, 184, 563 372, 中段左より 423, 304, 476, 459, 下段左より 311, 268, 428, 419, 555, 下 上段左より 512, 513, 中段左より 266, 247, 249, 267 255, 下段左より 256, 257
- 8 1.段左より 64, 99, 533, 420, 69, 510, 346, 二段左より 248, 3, 537, 243, 473, 三段左より 507, 501, 502, 508, 四段左より 506, 475, 478, 508, 505, 五段左より 465, 470, 464, 467, 463 六段左より 469, 460, 472, 466, 457, 下段左より 468, 473, Noなし, 474, 471, 461
- 9 1 2 t - 4 (上層上面) 出土舟釘と磁器, 中 上段陶器, 下段骨片と木炭(3 t - 1, 3層出土) 下 左 2 t - 6 (4層) 出土鉄片, 中 2 t - 7 (3層下) 出土骨片, 右 2 t - 9 (3層) 出土舟釘
- 10 繩文土器表裏写真図 (左より 73, 278, 27)

第28図 金戸山関係写真図 上 金戸山台上の地伏石の状況 中 金戸山の登坂路 下 登坂路下の路跡

72

第29図 (1)丹龜園神社 (2)高島の岬 (3)浜ノ城の遺構の一部 (4)八天山 (5)川竹山の八大王正碑 (6)横木丸太郎氏旧邸から (7)島原の浦 (8)童神石碑 (9)弁天山 (10)島山一帯 (11)-イ, (12)-ロ 蛇信仰

73

報告使用遺物(昭和31、32年度採集)区分表

遺物番号	品目別	大手浜採集物の摘要	備考
A - 1	土師器		(古) 7回
A - 2	弥生土器		" "
A - 3	"		" "
A - 4	土師器	昭和25.11.11 鶴取南発掘 大手浜岩崎井同氏保	(古) 7回
A - 5	弥生土器		" "
A - 6	土器		" "
A - 7	土師器		12回
A - 8	"		8回
A - 9	"		" "
A - 10	土器		" "
A - 11	弥生土器		" "
A - 12	土器		" "
A - 13	"		" "
A - 14	"		" "
A - 15	"		" "
A - 16	"		" "
A - 17	"		" "
A - 18	土師器		" "
A - 19	土器		" "
A - 20	土師器		" "
A - 21	"		" "
A - 22	土器		" "
A - 23	土師器		" "
A - 24	"		" "
A - 25	"		(猛) 6回
A - 26	弥生土器		" "
A - 27	土師器	製塩土器かも知れぬ	" "
A - 28	"		" "
A - 29	"		7回
A - 30	須恵器		" "
A - 31	土師器	組織痕土器	" "
A - 32	銅鏡		" "
A - 33	青銅釘		" "

註 (古)は古田保、(猛)は猛島神社保。

報告使用遺物(昭和31, 32年度採集)区分表

遺物番号	品目別	大手古採集物の摘要	備考
A - 1	石器	玄武岩	(古) 15回
A - 2	"	"	" "
A - 3	"	"	" "
A - 4	"	"	" "
A - 5	"	"	" "
A - 6	"	黒曜石	" "
A - 7	"	玄武岩	" "

報告 使用 遺 物 区 分 表

遺物番号	品目別	出 土 地 (トレンチ別)	備 考
3	土 錐	採 集	
19	土 器	"	
26	陶 器	" (古戸戸かも知れない)	オロン貯
40	"	"	
41	土 器	"	
44	七 鍋 器	"	
46	陶 器	"	
51	上 器	"	
54	"	"	
58	石 器	"	玄武岩
59	"	"	"
62	上 鍋 器	"	
63	陶 器	"	
64	土 鍋 器	"	祭祀土器
73	縄 文 上 器	"	縄ヶ崎式
74	弥 生 土 器	"	
75	"	"	
76	陶 器	"	
92	鐵 钉 片	"	
97	鐵 片	"	
98	土 鍋 器	"	
99	"	"	祭祀土器
100	陶 器	"	
113	石 器	"	玄武岩
133	十 鍋 器	"	
161	石 器	"	玄武岩
173	弥 生 土 器	"	底 部
181	須 忠 器	"	
184	縄 文 上 器	"	阿高式か
186	石 器	"	玄武岩
192	上 器	"	
196	"	"	底 部
197	"	"	縄 文
199	陶 器	1 T-11 2層上部	
198	"	1 T-11 1層中	
200	須 忠 系 土 器	1 T-11 "	

報告 使用 遺物 区 分 表

遺物番号	品目別	出土地 (トレンチ別)	備考
201	土器	採集	弥生
204	上部器	"	
207	"	"	粗獷痕
208	上部器	"	弥生
209	"	"	"
210	石器	"	紡錘
211	土器	"	
214	陶器	"	
230	磁器	1T-8 1層	
241	弥生上部器	採集	
242	上部器	"	
242	上部器	"	
244	陶器	"	
246	土師系か	1T-10 4層上面	上部の工か (鎌倉期の陶丸とするには小さすぎる)
247	磁器	3T-1 3層	
248	土器	1T-7 3層下部	
249	陶器	3T-1 3層	
250	磁器	1T-7 1層	
251	"	" "	
252	"	"	
253	"	"	
254	陶器	"	
255	上部器	3T-1 3層	
256	磁器	"	
257	上部器	3T-2 2層	
259	磁器	1T-5 1層	
264	"	1T-11 1層	
266	"	3T-2 5層	
267	土師器	"	
268	上部器	2T-2 6層	調文、スカリ式
273	弥生器	採集	丹形
277	陶器	"	
278	上部器	"	網文
304	"	"	"
311	"	"	
323	瓦器	"	

報告 使用 遺 物 区 分 表

遺物番号	品目別	出 土 地 (トレンチ別)	備 考
329	石 器	採集	玄武岩
346	土 師 器	"	底 部
372	上 師 器	2 T-10 3層	縹 文
376	瓦	2 T-10 5層	
415	土 師 器	採集	口 棚 部
416	"	"	底 部
419	土 師 器	"	黒 川 式
420	土 師 器	"	口 棚 部
422	土 師 器	"	縹 文 か
423	"	"	"
424	"	"	
425	"	"	
428	石 師 器	"	黒 磬 石
457	土 師 器	"	
459	"	"	
460	土 師 器	"	弥 生
472	土 師 器	"	
475	土 師 器	"	
476	土 師 器	"	
478	"	"	
480	陶 器	5 T - 3	
481	ス レ ー ト	"	
482	土 師 器	"	
483	磁 器	"	
491	瓦	5 T - 5 4層	
492	陶 器	"	ス リ ベ
493	磁 器	"	
501	"	5 T - 1 3層下	
502	陶 器	"	
505	石 師 器	採集	玄武岩
506	陶 器	"	
507	磁 器	4 T - 5 3層	
508	陶 器	4 T - 4 5層	
513	磁 器	5 T - 1 3層	
514	陶 器	"	
515	土 師 器	5 T - 2 3層	

報告使用遺物区分表

遺物番号	品目別	出土地 (トレンチ別)	備考
516	磁器	5T-2 3層	
517	"	"	
518	陶器	"	
519	"	"	
520	土師器	"	
521	土器	"	弥生
522	磁器	1T-1 1層	
523	土器	"	縄文、曾畠か
524	陶器	"	
525	土師器	"	
526	鐵滓	採集	
527	石器	"	碧璽石
528	土器	"	黒川式
535	"	"	
536	"	"	弥生底部
550	土師器	"	製塙上器
557	陶器	6T 炒利層	
558	"	"	
559	土器	"	縄文
560	陶器	"	
562	カラス破片	"	
563	磁器	"	(他に同一番号で阿高式あり)
564	"	"	
566	"	"	
567	"	"	
568	"	"	
569	"	"	
570	"	"	
571	"	"	
572	土磁器	"	
573	磁器	"	
574	"	"	

以下遺物番号が重複するものあり、図、写真図を参照して判断されたし。

報告 使用 遺 物 区 分 表

遺物番号	品目別	出土地 (トレンチ別)	備考
487	土器	6 T 砂利層	
488	"	"	
489	"	"	
490	"	"	
496	"	"	
501	瓦	"	
502	"	"	
505	陶器	"	
506	"	"	
507	"	"	火鉢
508	瓦	"	
509	"	"	
510	陶器	探集	製塙土器足
512	"	3 T - 1	
513	土器	"	
524	磁器	2 T - 13	
527	土器	探集	
528	"	"	
533	瓦器	"	
534	土器	"	
537	土錘	"	
550	土器	"	製塙土器足
554	"	"	黒川式
555	"	"	"
563	"	"	阿高式か

調査期間中の採集遺物

土器片 380, 石器 9, 上錘 4, 鉄片 3, 須恵器 2, 瓦器片 2

出土品 (1として弥生と十師器) 58, 土錘 1, 石器 1, 磁器 47, 陶器 57, 瓦 12, 須恵器 1,

鉄片 1, 鉄序 1, カラス 1, (いずれも破片)

金戸山より鉄斧若干, 木柶若干, 合子破片 1



## はじめに

大手浜遺跡は、長浜遺跡あるいは金戸山（金蔵山）遺跡等と從来呼ばれてきた。

地形的には同一地であるか、旧島原からすれば区々の名称も、土地の人々の区々な呼称と共に頒けるものがある。（第2図-2）

大手浜周辺一帯は、昭和12年4月22日島原海岸風致地区に指定され、以前は猛島海水浴場もこれに含まれ、老松と青い海、白い汀に加えて、清水の湧く生活地として、併せて島原市民の希望されるに充分な、代表的風致海岸であった。

今は、市民によって保護されるはずの、自然の文化も色褪せてき、不要物の堆積場であり、市民生活の、生活費糧の癡着場の感がある。

水の都と称されてきた島原市民も、無尽てない水の価値を徐々に認識し、ここに下水道処理場の建設が計画され、（広報「しまはら」317号、S.55-12）後で述べるよう、この地特有の、不可解な難問の処理に市当局が着手はしめた。

その市前調査として、下記の如き調査団を昭和55年10月に編成、遺構測量、発掘調査を10月11日より、12月15日までと、明けて昭和56年2月17日より同25日までの間に実施した。

### 記

島原市下水道処理場建設に伴う大手浜遺跡調査団編成表

調査団顧問 平井 岷（島原市教育長）

〃 清水 孝一（島原市事業推進室長）

調査団団長 中山 春男（社会教育課長）

団員 横木 光祥（教育委員会）

〃 計画進行担当

副島 義一（教育委員会）

〃 施務管理担当

古賀 雅敏（事業推進室）

〃 人江 錦臣（〃）

〃 橋本 信彦（〃）

〃 小畠 弘巳（熊本大学学生・考古学専攻）

・発掘担当

古田 正隆（日本考古学協会会員）

・金戸山の歴史的位置づけ担当

吉田 安弘（島原市文化財審議会委員）

以上

調査期間中特に労務を担当された

中尾ヨンエ、馬場マツコ、吉岡タカコ、吉岡ヨネコ、村田ハルエ、馬場カスエ  
の各氏には、寒風の戸建て連日の勞をわすらわし、ここに改めて感謝の意を表したい。

教育委員長 山本鶴五郎、猛島神社宮司 寺田一晶の各位には多くの支援を賜わり、特に長崎県  
水産試験場島原分場の各位には、連日に亘る物品の保管をはじめ、厚情を賜わった。また島原振  
興局関係各位にも合わせて、ここに銘記し、感謝と敬意を表したい。

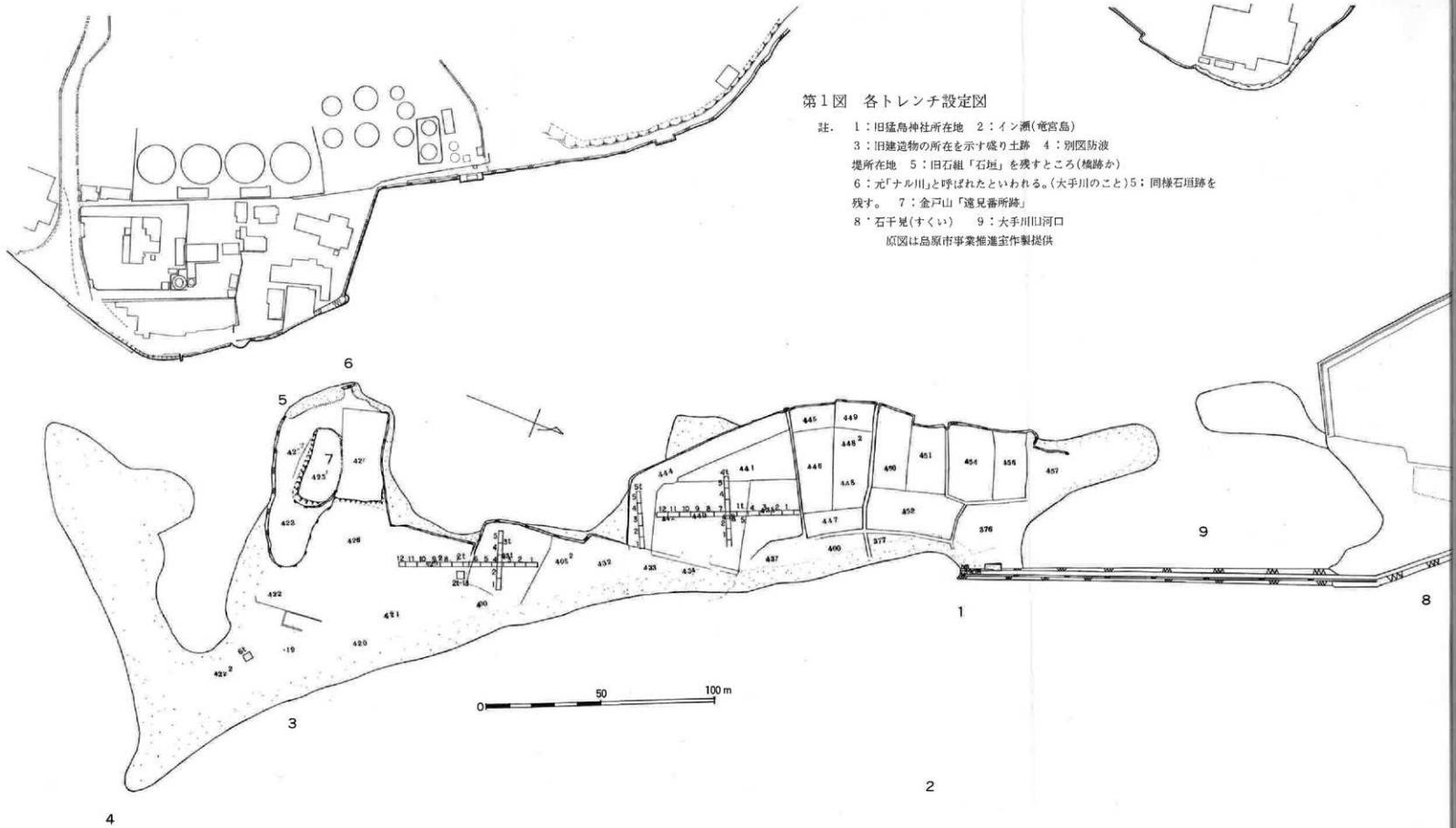
昭和56年3月

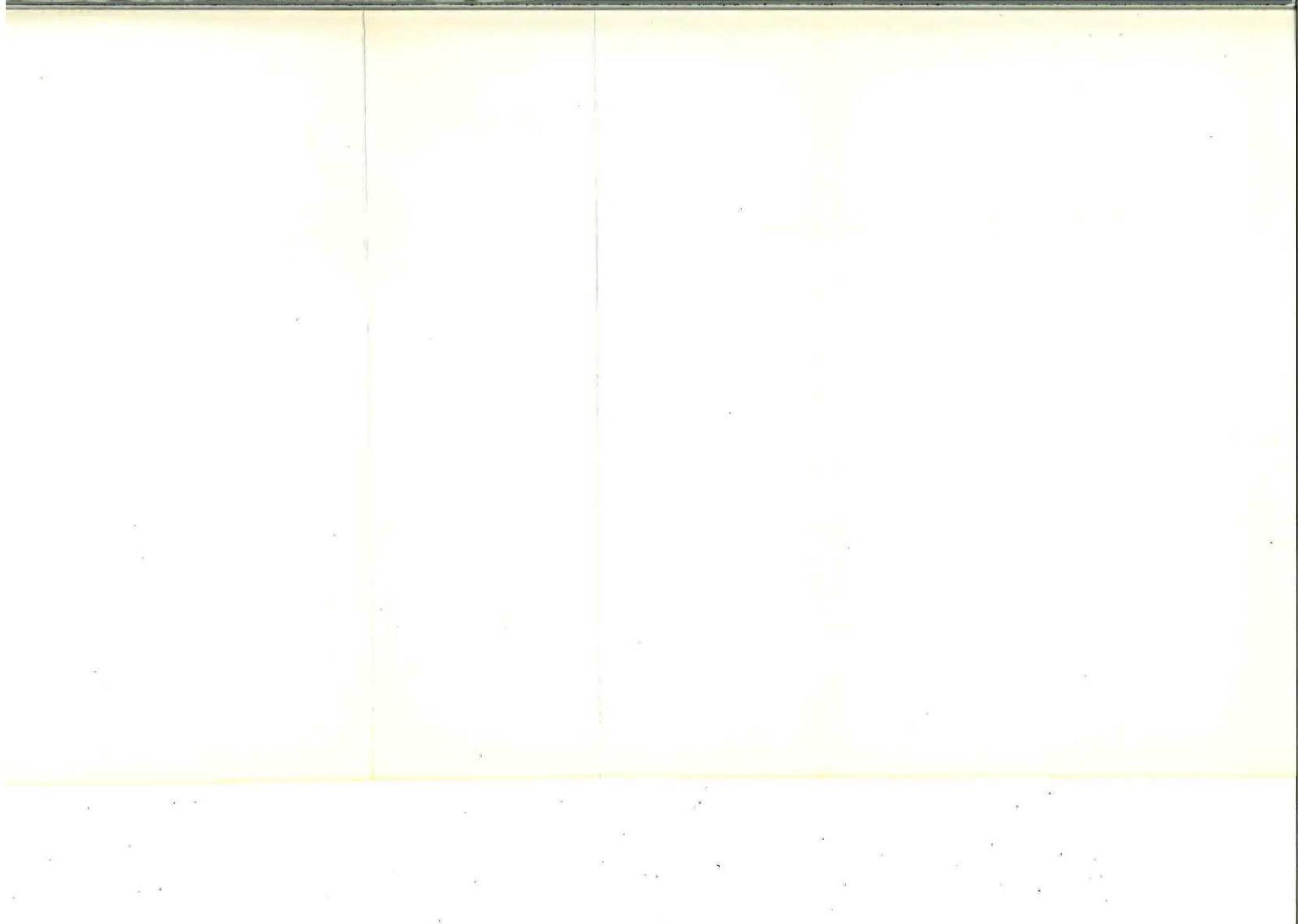
古 田 正 隆

第1図 各トレンチ設定図

註. 1:旧猛鳥神社所在地 2:イン瀬(竈宮島)  
3:旧建造物の所在を示す盛り土跡 4:別図防波  
堤所在地 5:旧石垣「石垣」を残すところ(施設か)  
6:元「ナル川」と呼ばれたといわれる。(大手川のこと)5:同様石垣跡を  
残す。 7:金戸山「遠見番所跡」  
8:石千覗(すくい) 9:大手川山河口

原図は島原市事業推進室作製提供





## 1. 大手浜遺跡の概要

大手浜海岸の風致に富んだ旧社は、「はじめに」で述べたが、戦後間もない頃、爆発的に流行したのか釣フームであった。

当時島原市立戸町(1918番地)に住む組取清氏もその一人で、特に海の磯釣りを楽しめた同氏は昭和25年11月14日の夜、大手浜岩崎界(現在の防波堤南端より東約30メートル位の地点「第2図1の300番地附近」)で夜釣り時、大波に洗われた背後の砂中に、何やら容器らしいものが首を出していることを認め、これを掘り出してみたら、土製の壺であった。(図版第5図A4)

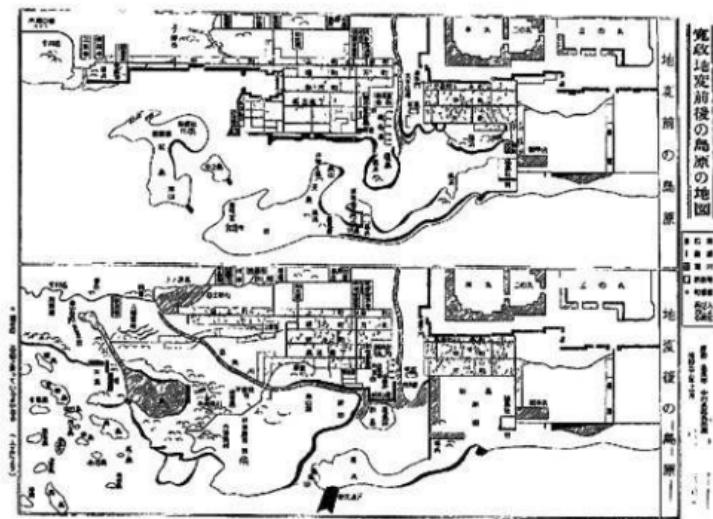
壺は丁度首を土に、砂中に据え置いたように埋めおかれていたものか、大潮(当時は大潮「大潮は旧暦1月15日の前後3~4日」)のため砂か洗い持ち去られて出土したものらしい。(報者も当時現地に案内され実見)

以来大手浜は、弥生文化終末から、古墳文化初頭頃の遺跡という報が伝えられた。その後昭和31年の台風に際し、津波状の波浪のため、大手浜一帯の海岸は洗われ、日本の土砂は流失、大きく海の進入人があった際、特に官の1356番地の、飯島印太郎氏所有地を中心に、附近より多くの遺物を出土、遺跡地としての確認かなされるにいたった。(現在の防波堤の大部分は、この災害復旧工事として築堤された。)

したがって遺跡は点てなく、橋行一氏の報もあり、現猛島神社海岸<sup>14</sup>から、土師器の附着したヒーチロノク<sup>15</sup>も出土発見されたか、これは必ずしも気品との関係を論ずることには、疑問のあるところとしても、南有島町海中にはサンゴの一種か群棲し、以上地的、地理的状況からみた場合、圃場整備のための干拓<sup>16</sup>の、フルトーサーによる整地や、現二好屋新田地区の、未調査のままの宅地開発についても、文化財保護法からみて、行政指導上観察の残るところである。



第2図-1 大手浜の地積図（1は現在の堤防）—— 現在の水際線



第2図-2

#### A. 遺跡地の地形変化（第2図-1, 2, 図版第4図-3）

先に、約50年以前頃のこの地の地形をみると、第2図-1の地盤図の如く、現在の約3倍の広さをもつ、島状地形であったことが知れ、今その3分の2は、海面下に没するものの、大潮時の干潮時は干潟化し、現在でもそこには地盤（所有権）が存在しているありさまである。<sup>16)</sup><sup>17)</sup>

以上述べたような現象は何か原因したのであろうか、かつて報者か、島原市の防災資料として島原市海岸地帯の地盤の不安定さを、指摘したことがあった。年間約1mmの沈降が続き、その上局部地の地盤活動が加わり、近くでは近世三好屋新田の埋め立てを行なわれ、天保8年より数年間それらに基づいた潮流と、波浪の流動変化がおこり、時には陸化し、時には海化し遺物を示す年代の、人々の生活地は一体どこに比定できるのかさえ定かでない。（土師初頭文化は旧岩崎鼻地城）<sup>18)</sup>

とはいえたるには、竜宮島、「イン瀬」等の名もあり、現防波堤南端東側海中には、猛島神社の所在が伝えられ、現猛島神社海岸から、三好屋新田を含めた大手浜海岸は、（旧陸地の干潟地を含め）遺物各年代の人々の生活に、大きな役割を果たしてきたことは疑えない事実であるが、地形の変化の甚しさか、もろもろの複雑性の基をなしていることも、また事実である。

遺物からみた場合、上の原水原地遺跡から、白土湖水北側は、（山崎屋酒店西裏の、現市道上）弥生中、後期遺跡であり、恐らく当時の海岸線であったことが考えられ、沖積地の発達は、上の原上部、木光寺附近に古墳の成立を見るに至ったことは、よくこの間の事情を裏付け、以上のことを考えれば、大手浜遺跡は、大部分海中に消えた旧島状地形上に形成されたかも知れない。

という、（大手浜より沖田綫附近につらなる地）示唆か得られよう。

洪積層の状況からすれば、三会海岸より沖田海岸にかけてみられ、市街地は寺町の上部（魚山寺附近）にも一部に拡がっている。してみると、広く拡がる低洪積層上に、その後度々の火山爆発の降下物が被さり、結果的には、この地の旧地形は想像と判断の域を出ないのか現実で、近世のものは第2図の2による以外、知る方法はないといえよう。

### B. 遺物よりみた遺跡の文化年代（図版第5図～16図）

図中73, 184, 197, 268, 278, 304, 372, 419, 523, 528, 559, 554, 555, 563は、縄文土器片とみられるもので、遺物全体からすれば、2パーセント足らずの数であるか、更に422, 423も同様と思われる。

523は骨烟式らしくみうけられ、184, 563は阿高式で、268は滋賀県式系の、蒲原内黒土B1の系統の、縄文晩期土器らしく、島原市巣石原でも出土例がある。この資料は、419, 528, 554, 555の、黒川入土器と平行関係の遺物とみられよう。

523は、骨烟式土器とみられるか、器面のローリング痕が甚だしく、確實にとはいえない。184, 563は、中期阿高式土器で、近くは一會下町海中干潟で多くの資料がみられ、73の錦ヶ崎式土器はこれらの文化に次ぐものであろう。

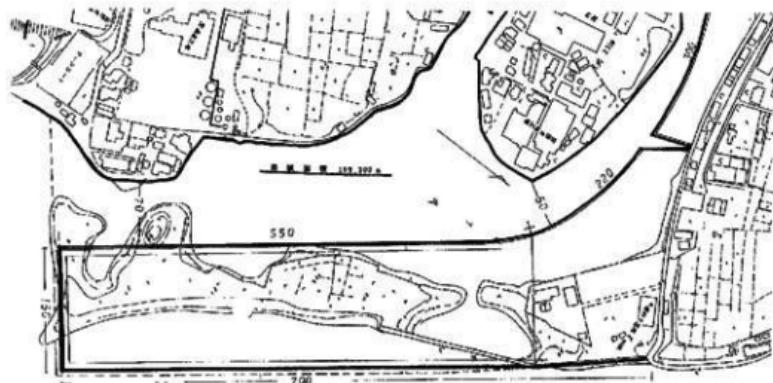
以上の遺物からみて問題は、523土器であるか、この土器の文化比定の確実性が高いものとすれば、縄文文化の前期から中期、後期、晩期、弥生文化後期、古墳文化前期、平安時代後半、その後とひとひに鎌倉、室町、戦国、江戸末、明治、大正、昭和の各期に及び、その間断続続はあるか、この地居住者の生活の、永い基盤であったことにちがいない。

遺跡地の文化の断続性の特質は、述べたように、海岸接地線の、形成消滅という自然現象に、支配されたということを見のかせない事実であろう。

#### 註解

- 現在は片町新田と町名が変更されている。車站は当時のことで、現存は島化、防波堤の外となり、市の所有地となっている。
- 図版中A番は昭和31、32年採集のものであるか、破片が大きく、ローリング痕をみないため、遺跡地であったことが確認できた。
- 長崎県教育委員会「長崎県遺跡地名表」、長崎県文化財調査報告書第1集、S-37-8、文部省「長崎県遺跡地図」S-41、筆者も参加
- 横行・「五島の beachrook について (その一)」長崎大学教養部記要、自然科学4巻別冊、S-40-3
- 古田「今比雅遺跡」南有馬町教育委員会刊、S-56-3
- 古田「島原市の島中干潟(因縁)」古田委員会埋蔵文化財報告2集、S-49-1、古図はいずれも現地形と類似して記載されているか、遺物の出土状況からみれば承認できないもので、古記、古文書の

- 研究には充分注意の必要があろう。
- 7 古田「古代遺物からみた島原市の防災資料」S. 46-7, この一部は前出6にも転載してある。
  - 8 古田「高島神社旁——島原市に所在する——」島原新聞社, 豊島文化16, S. 36-1
  - 9 前出3
  - 10 前出3
  - 11 埼井浩足「佐賀県大津古墳群遺跡」考古学年報1, S. 26
  - 12 鎌木義吉, 本村幹太「中山」日本考古学講座3須恵, S. 31-2
  - 13 日本考古学会西九州特別調査委員会「島原半島の考古学的調査第二次概報(昭和36年度)」九州考古学14, 1962 遺物は文化財指定
  - 14 前出6



第3図 推立予定図

## 2. 遺構

### A. 防波堤 (図版第1図)

防波堤遺構は第1図4地点に、幅約7~8米、全長約50米余の、砂丘端より（実際は金戸山近くからの構造であるか、露出石は、二次的用途のため除去された残存物である）東の海中に突出した形であり、石材は安山岩であるか、大は3t近くのものもあり、基礎は列石状に横に並べ、内外共に人頭大以上の多量の捨石で保護されている。（多分基礎下は、洪積層粘土状の、海水塩分によって、凝固化された上に乗っているものと考えられる。）（図版写真図第20図～第23図）

このような大かかりな石積技法は、築城石垣にみられるか、ここでは基礎石以外は、方形に形成されたものではなく、大部分は自然石か、若干打割り法を加えられたもので、この石積の二次利用といえは、近くに築城された島原城の石垣以外になく、現地で幣形されたと認めるに足る、割石片は全く残されていない。

若しこの事実が当を得たものとすれば、島原城の築城以前の遺構とみなければならぬ。

「こきいてて、なおまたしはし島原に、もうこし船の誰れを待つらん」これは鎌倉時代になつた、新選六帖の中に、藤原光俊の歌として残されている。

一にいう有馬島とは島原半島のことらしく、合津海峡の海峡時代に発生した島名であろうここにいう「しまはる」とは島原（しまはる）の前で、島原の人びと、即ち海路口、（うしくち）港のことであり、現在の島原内港は、小湊と称された寛政地変後になったもので、（第2図-2）外港は昭和38年以後のものである。これら地変による地形変化からみて、旧港（みなと）の所在、即ち島原の前と呼ばれたところは、とくに伝承は消えたか、本遺構は百間波止場と呼ばれ、第2図の、2の下にみられる新大波止は、（第1図の3）フロイスの日本史（古田報參照）に記された染構防波堤で、いずれにしても、旧港の島原の前かこの近くに所在したことは判断できるものの、漢字、その他、上述した地形の変化は、この波止場を無用のものとし、石材の大部分は持ち去られたか、鎌倉時代かそれ以前の、島原の山を裏付ける施設遺構であることは、別項遺物で述べる如く、充分に傍証によって検証できよう。

第1図8地は、干石見（すくい）施設で、現在も利用価値は充分に残されている。「すくい」は、多分に祖源をたとへは、ジャワ島のチャリ船のチャンティ・スクウにあるらしく、当地方の石垣等、支石塾、古代山城の石積を含めて、イントネシヤ文化の混入するものが多く、これ等の研究と併せて尙将来考究の必要があろう。

### B. 金戸山（金藏山）周辺の石垣 (図版第2, 3図)

図版第2, 3図に示す石垣の残存物は、山地形が出てこない以上、かつまた古記に探し出せない限り、不明という以外になく、（5項古田報文とは別の時代差を含めた事項について）第1図や第2図によつては判断の域を出ないか、第1図の6は、「ナル川」と呼ばれ、以前橋があったとの所伝があり、現実にその橋の基礎石らしいものが残り、これを眞ちに第2図-2にみる、寛政

地変後のものとするには、前項波止場遺構との関係、右組の類似形といった点からみて、直ちに同意することは出来かねる。(ナル川とは、古くは今の大手川の名称である。)

### C. 金戸山(金藏山) 「図版第4図-1, 2」

第5項古田報文にゆすりたい。

金藏山は、金戸島とも呼ばれる大手浜は、江戸時代島原の花街かここにあり、この廻し舟貨か2分度であったため、2分度(にふんと)といったということを、報者はかつて古老に聞いたことがあった。

なお附記したいことは、地名の「金」文字で、当地方の多くの鉄遺跡関係地名に、類似の「金字地名が多く、近くには第2図-2にみるように、楓山屋<sup>120</sup>」が埠頭の東側にある。楓山屋の集まつた町であった訳でなく、西有家町の製鉄遺跡の横を流れるのか「フロ川」で、砂鉄の水洗いと関係があり、当山上でも鉄滓<sup>121</sup>が出土、杉谷の鋸山職、か砂鉄をこの地より採取したとのこともあり、製鉄との関係があつたように考えられるか、確たる資料が今のところ得られてない。

### D. 石干見(すくい) 「第1図8地点及び写真図参照」

A墳て若<sup>122</sup>ふれたか、遺跡地に近接した列石遺構であり、有明海沿岸地区報告によれば、施設の内容、態様、仕様、名称等述へられてないか、附隨する多くの名称は、東南アジア方面からのものとみられる多くの語が混在し、(例えはオロクチ「水門」、ドンク「一種の神籠石祭石」等)この種の存在は東南アシア、五島列島、有明海沿岸等でみられ、陸上では神籠石等となり、同一種法と構造であることは、古代航海文化との関係から、今後特に注意されなければならない。

#### 註解

- 15 板倉氏の島原築城は元和9年(1623)から、7ヶ月の歳月を要し、祇の城、寺中城、原城、深江城等の石垣を利用した。松浦市二ヶの山の防壁(元和の頃のもの)と積み方に類似点が多い。
- 16 承久3年(1221)後鳥羽天皇が北条義時を討たんとした謀議に参画した藤原光義の子、父の罪に連座して承久3年7月12日筑西に流された。
- 17 高来島(たくしま)、度島(たくしま)等古昔や、中国書「日本考」等にみえているか、有馬(間)島は、度島の「まくら詞」か。しまはるの浦の「まくら詞」かとも考えられるふしもあり、古代地名考に今後万葉集等を手かかりとして考究の必要があろう。
- 18 愛野町と森山町の境。古田「合沖地図」島原鉄道株式会社、S. 31-9  
山崎光夫「冲積性(新石器時代)における大陸交通と諫早地図並びに愛野地図」九州大学教養学部地質研究報告第5号、1958. 2
- 19 「大法輪」11月号、S. 55-11-1刊所蔵チャンター、スクウ参照  
古圖に記載はなく、寛政地変後のものとみられるか、積法の伝承は注意されよう。
- 20 ここでは何等遺物資料もなく、防波堤資料をここに適用することもははかられるので、不明遺構と

しておく。

- 21 古田「製鉄遺構を伴った小原下 遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告第9集, S., 54-6
- 所収第3表
- 22 現地の火山灰土（1.表七）では約平均7%の砂隕が包含している。
- 23 長崎県教育委員会「有明海沿岸地区的民俗」長崎県文化財調査報告書第11集, S., 47-3
- 24 篠山猛他「おつほ山神隕石」佐賀県文化財調査報告書, 1965, 本報では山城説を決定つけたもので  
あり、朝鮮との関係を一義とされてきたが、島原半島を初め長崎県関係のこの種のものか紹介されて  
ないため、ここでは単に南方との関係のみを示唆しておくに止めておく。石子見には必ず3ヶ所のオ  
ロクチ（水門）があり、島原半島有明海沿岸には、最近まで石子見の積みかえを生業とした技術の所  
持者が生存している。

### 3. 各トレンチの状況 (第1, 4図, 図版第26図)

#### 1 トレンチ (第1図, 第4図-1, 2)

1トレンチは、巾2m, 長さ5mを1区分とした、それぞれ1より12までとし、各区は、幅巾2m, 長さ2.5m, 深さ約1.5m前後まで発掘し、中には2mに及ぶ深さまで掘り下けたものもある。

発掘面積は60m<sup>2</sup>に及ぶか、各トレンチの基本的層序は、1層は暗褐色砂土の表上、2層は黄褐色砂土層、3層は暗灰色砂層、4層は暗茶褐色砂層であるが、江戸形成の時間差によって小礫層か混り合い、いうなればトレンチ一つ一つが異なる有様で、例えは1t-3の如きは、3層～5層に粘土塊や、灰色火山灰土の含む層か入ったり、赤褐色の小礫層か入る状態で、いずれのトレンチを見ても、包含遺物からみて近世以後の形成で、発掘出来る可能な深さまでは、層の形成の変化はあったか、近世のものはばかりであった。

#### 2 トレンチ (第1図, 第4図-2, 3)

2トレンチも、1トレンチ同様巾2m, 長さ5m区画を12とし、別に3m<sup>2</sup>を設定2トレンチ13とし、このトレンチも約60m<sup>2</sup>の試掘を実施した。

2トレンチの地層層序の基本は、1層暗黒色砂層、2層黒褐色砂層、3層灰色砾層、4層黒褐色砂層、5層小礫層、6層砾層、7層褐色砂層、8層小礫層であるが、2t-4, 2t-5でみると、8層まで明治期の歴器が包含し、近世というより、最近の形成層序とさえいいく得る状態であった。

#### 3 トレンチ (第1図, 第4図-3)

3トレンチは、2トレンチにクロスしたもので、約25m<sup>2</sup>の面積を発掘したが、層序の形成は、2トレンチと変わることはなかった。

特に3t-5は、2t-4, 5と類似した遺物の包含をみた。

#### 4 トレンチ (第1図, 第4図-4)

4トレンチも前者同様の区画の5つを試掘、その全面積は約25m<sup>2</sup>である。

4トレンチは、1トレンチにクロスしたもので、層序の形成は4t-1のみか、1層に若干の貝殻を盛入する、薄い砂層か乗るもの、その他は1トレンチ同様である。

#### 5 トレンチ (第1図, 第4図-4)

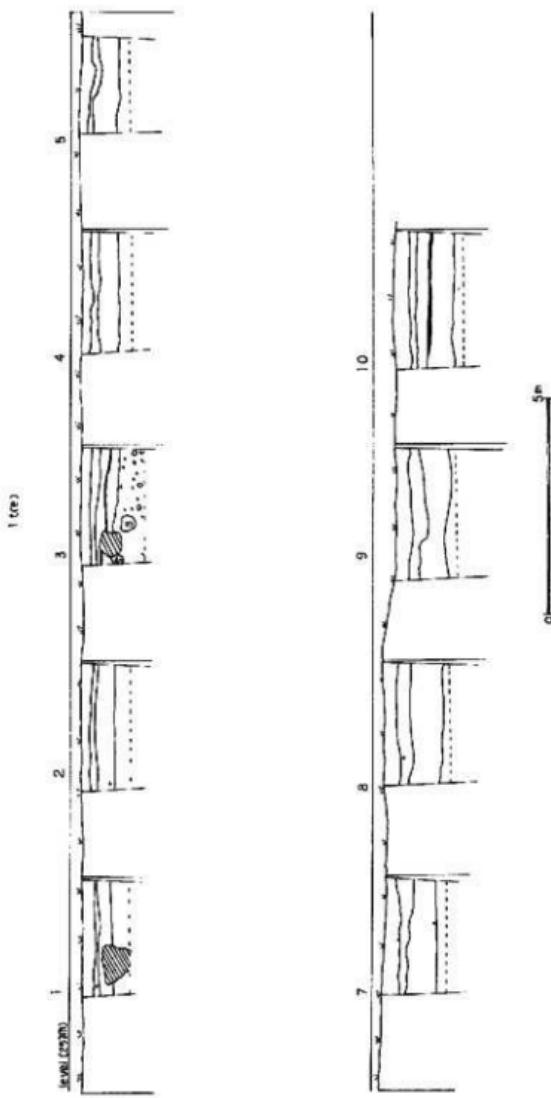
5トレンチは、1トレンチと1分状になるような形で、1tの南の旧農道上の小高い(20~30cm高)丘陵に設定した。3トレンチの層序は、1層は暗黒色砂層、2層は褐色和菴砂層、3層は白灰色砂層、4層は褐色砂土層。(旧道路上面層かも知れないという感かもたれた)このトレンチでは、5t-1, 5t-2の、3, 4層に骨片、陶器等、古墳後期の遺物を含み、多分にこのトレンチの3~4層は、寛政地変時の形成層かとも判断できる状態であった。

#### 6 トレンチ (第1図, 第4図-5)

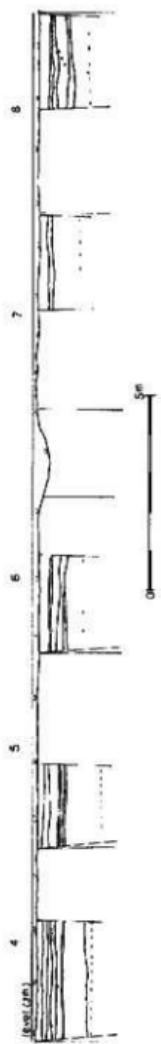
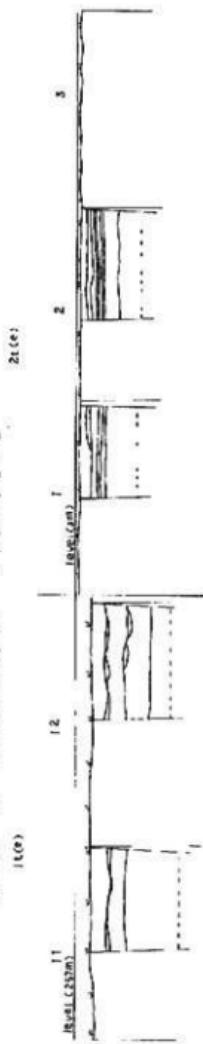
6トレンチは、7層まで最近のカラスひんの破片が包含して、最近の形成砂丘地であった。

第4図 各トレンチ図

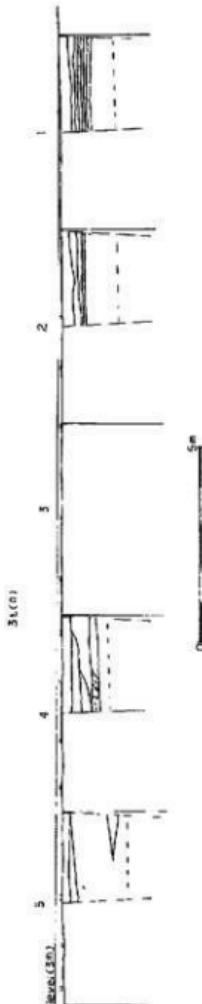
1. 1トレンチ1~10



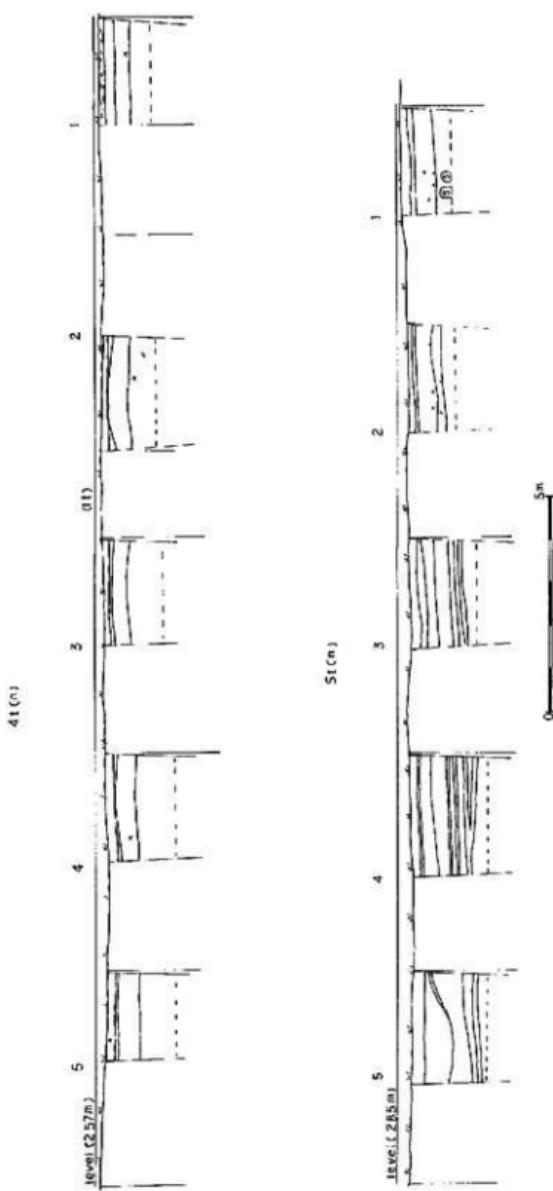
第4図-2 1トレイン11, 12 2トレイン1~8



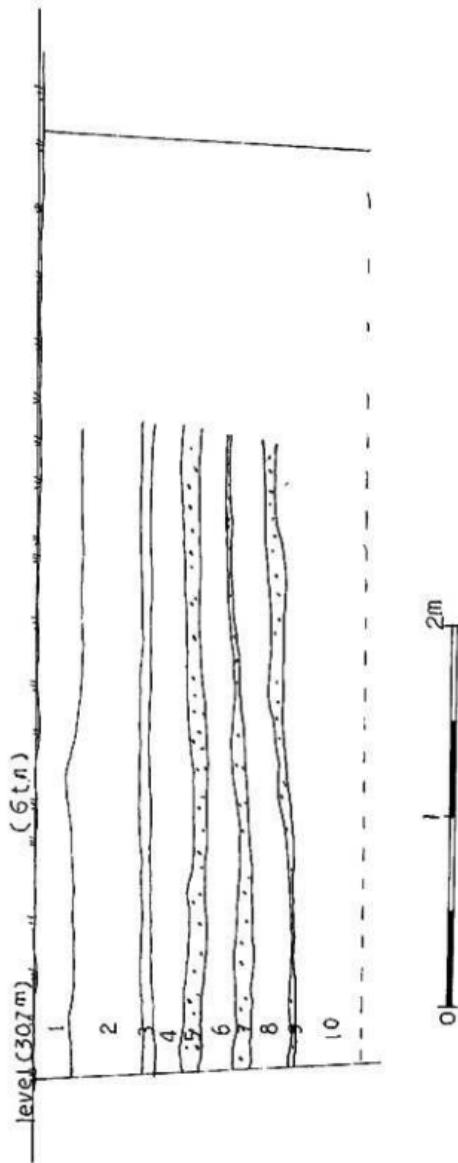
第4図-3 2トレイン9~13 3トレイン1~5



第4図—4 4トレンチ1～5 5トレンチ1～5



第4図-5 6トレンチ(北側)断面図



6トレンチは、即防波堤基部砂丘上に設定、5mの試掘を行なったが、層序は、1, 4, 6, 8, 10の各層は灰色砂層で、2層は暗褐色砂層、3層は混雑砂層、5, 7, 9の各層は、小礫層であった。うち、1, 2層は風成層らしく、3層以下か海成の層とみられたが、各層の包含物は上記のとおりである。

#### 註解

- 25 2m以上の深さでは海水の湧出があり、大潮時、あるいは高潮時には40cm位の深さで潮か入り発達困難な状態であった。
- 26 江戸後期半頃より古いものはない。



第5図 大平浜遺跡全景（上・下続き）  
（↑）上の左は南、それより右に廻る。（南→南西→西→北西）

#### 4. 遺物 (図版第5図～第16図、図版第27図)

大手浜の遺物については、従来部分的な報告があり、特に注意しておきたいことは、土師器に<sup>147</sup>圧痕された網目文土器の出土が知られ、更に改めて述へなければならないことは、縄文土器の採集か新たに加わったことである。その様相は、多分に三会下町<sup>128-1</sup>高内文化の後、晩期のものと類似していることであるか、523等は、舟元式系土器であるか、曾焼式に該するものであるか、器面摩滅が甚たしく、197、278、304、372、422、423、559等の土器同様、輪牛上<sup>128-2</sup>の決定が困難なことであるか、とはいって、縄文文化が相当期間、この地に断続かあっても、存在した事実である。

184、563の阿高式土器の採集、73の如き鐘ヶ崎式、419、528、555、563の黒川式土器の採集によって、両文化の存在は確実にされ、73、197、278、304、372、422、423、559 土器は、黒川式

第 6 図



第6図 発掘調査現場と背後の島原市街（東より西に向かって）

ないしその平行期に比定できるのでなかろうか。石器は摩滅が甚たしく、又、述へる程の資料はない。先史、原史遺物の、故の上からでは、遺跡の土体は土師初期文化であり、64、99等の、土師系祭祀土器は、そのほとんどが防波堤下部より出土し、多分防波堤の構築と関係あるらしく、近くでは日之江城、守山城、南有馬町金比羅遺跡等で出土し、古記、口傳等によって上記の年代が推定できる。最近の報告例にみるこの種糸切底の土師器は、岡田油城跡でも知られている。

したかって鎌倉時代、あるいはそれ以前の構築とすれば、別記の古歌とも符合するものがある。246は土師系赤褐色の小玉て、11-10、4層上面より出土したものたか、多分土鈴の鈴玉かとみられ、土鈴は、長崎県内では深堀遺跡より出土例<sup>129</sup>あり、沖田殿<sup>130</sup>遺跡等との、祭祀關係か猛島神社祭祀と關係をもつ、奈良～室町期頃に比定できるものかも知れない。323、533は、黒灰色の瓦器て、上記土師祭祀土器と平行する文化の所産とみられよう。

3、242、248、257、472、572、537は土錘て、中世以降のもので、各時代も区々である。

A27、550は土師器て、製塗土器の脚かともみられる。類似するものに 510があるか、これは陶

器で、製塩上器と関係を持つか、ホーローク（熔炉）等の持手か不明。（古墳後期より奈良、平安朝頃の鉢の把手もある。）類似品は、同市杉谷地区からも出土例があり、（報者保）後者に比定される可能性が強いかも知れない。（五絶の足とも考えることかてき、鳥取県米子市福島遺跡で飛鳥時代のものとみられるものの出土がある。—考古学シャーナル—13、1967-10、考古ニュース）

A32は刀の鍔の破片で、刀剣金具はこの他にも出土し、猛鳥神社に対する奉獻物か、ある時代急激な地変に会い、流失したものの残存物かも知れず、この地より2個の丁銀も採集されている。

A30、181、200は須恵器乃至須恵質の焼き物で、古式のものは含まれていない。376（21-10、5層出土）、491（51-5、4層出土）、501（6t 9層出土）、508（左同）、509（左同）は筑後瓦で、対岸よりの移入品がある。

陶器、磁器、ガラス器、これ等は近世から現代物で、述へる必要かなかろう。（陶器、磁器は県内の波佐見、佐賀県の埴輪物と、若干の伊万里物が入っている。）

210は石製の紡錘車とみられるか、文化的背景は不明である。

岡版第27図、写真図1図の329は不定形石器とみられ、一般にいわれる双肩状石器ではなく、三会下町海中干潟に類似が多い。

#### 第 7 図



第7図 金刀山（金鶴山）全景（南西より）

## 註解

- 27 前出6, 10, 古田「縄文文化期に現われる布痕土器」のとり文化12, S. 35-9
- 28-1 本志での土師器の粗織底上器は知られているか、九州では少ない。猿山豊「原生期の織物一九  
州の粗織底上器を中心に(上・中・下)」史研84, 86, 89, S. 36-5 ~ 38-1
- 古田「粗織文土器と細文晚期の文化航路」島原史学会第1回懇親会発表要旨 S. 37-5
- 28-2 田中千夫「北九州の縄文土器」考古学雑誌26-7, S. 11,  
杉山方栄男「筑前舞ヶ崎の縄文土器」考古学5-4, S. 9
- 29 北有馬町所在、近藤古氏巡査報告、報者久瀬國保
- 30 吉安町、昭和55年11月、吉田安弘氏と町吏資料集収集
- 31 住居跡内より他遺物と共に出土、確実な年代を推定できる状態であった。前出5
- 32 再次雄「岡田市域跡出土土器について」碧周の里20号、1980-12-15
- 33 長崎大学医学部解剖学第2教室「漆喰遺跡」人類学考古学研究報告第1号 1967、現物は長崎大学  
保管
- 34 前出3
- 35 古田「古代祭具」のとり文化21, S. 40-9 平安期のものとして吉野川刈田郡萩ノ町久附地区、  
「考古学ニュース」考古ニュース、51号、1970-12、奈良時代のものとして、滋賀県尼崎市起の橋  
川川床、「考古学ノートル」13、1967-10、考古ニュース
- 36 貨物にAを附したものは、報告書S. 31, 32年に採集し、その中の(A)とあるものは、私財神社  
に贈呈し、同社に保管されているものである。
- 37 1個は報者が採集、現在林医院長 林敏信氏保、他の1個は片町の魚師が採集保管されている。

## 5. 遠見番所と島原教会について (図版第29回)

- 1 <sup>もろこしふね</sup>諸越舟と島原の浦
- 書き出でて 猶またしはし島原に 諸越舟の誰を待つらむ
- 島原光親は、承久の乱(1220)に連坐して、幕府方に斬られたか、その子光俊も又、父の罪により領西の間に流された。配流先きは、西田の何處であるか、はっきりしない。
- 林敏信氏は多分島原ではなかったかと、推定されている。この歌は、光俊か「島」と題し作った歌として、「新撰六帖」に收められている。島というのは、松島のことと思うか、光俊のいう島原か島原とすれば、「島原」という地名か、鎌倉時代すでに使用されている。大手浜の砂州か、島の嘴のように「海路口」を作り、東南部には松島かあって、内部に港があり、島原の港は、恐らく隠くし港としての役割を備えていたのではないか。
- 諸越舟(もろこしふね)とは、唐土船のことて、當時、中國の舟か、島原の舟に宿泊出入りしている。
- 平安末期、太宰少弐になった平清盛は、特に、宋貿易に力を注ぎ、専門、瀬戸内海航路を重視

したが、一面に又、有明海に関心を示し、九州土豪との密接な関係は、この時代に始まったものと思われる。

有馬氏は、建保年間（1212～1216）に、島原半島に上陸したことになっているが、その出自については疑問が多い。有馬氏は、古代の航海集團の氏族で、島原半島在地の土豪ではなかったという見方が強い。特に平氏との関係が深く、鎌倉時代、すでに平姓を使用している。鎌倉御家人、越中氏、安藤氏との所領争いが多く「串山郷」「深江ノ浦」の件は、「吾妻鑑」「深江文書」に記されている通り。

有馬氏か、航海集團の水軍とか、又海賊等と呼ばれるのは、有明海や、野付半島の港の要所、要所に補給基地を置き、海の豪族としての商運を行っているからであろう。

口ノ串港の、古名を「越巣港」と言った。その口之串の港を中心に、有馬氏は、串山、深江、島原の港に拠点を置いている。

深江の浦には、深江氏（有馬彦五郎）、島原には、有馬經純の末弟島原城（純尚）を送り、その港を管理している。島原の浦は、平安末期から、土豪有馬氏の勢力圏内にあったものであろう。

古代、中世を通じ、大和朝廷は、朝鮮、中国との对外交易に力を注いたが、常に海上ルートは北九州か表玄闕であり、有明海は、九州の中心に位置したもの、裏玄闕として忘れられかねてあった。それだけに又、変幻自在の活躍の海ではなかったか。

島原半島は古代から、中世、近世にかけて、東南アジア、中国、朝鮮との頻繁な交渉があつて、その航海民の文化遺産か、各地に豊富に残っているのに覺かされる。

「越族は、竜をトーテムとして、あらわれる」江南の水は、東支那海を沿岸沿いに、交流し、山東省から一衣帶水、西南朝鮮、対馬の海峡に出て、禹流を利用すると、自然と九州に入る。交易者にとって、日本は魅力に満ちたところであり、至る所、良港あり、気候は温暖で物資に富んでいた。朝鮮半島に比へ魅力があったこと、考古学者であり、民族学者である、四分山一兵は「東アジアの古代文化」の中で、こんな風に言っておられる。

島原半島の各地に散在する古代遺跡から、上記の説を裏づける幾多の報告書が提出されている。

「島原の浦」は、古代交易の、重要な、航海ルートの要津であったろうと推察される。

さりげない路上の道祖神や、荒廃した神社寺院、小祠等の石造物や、忘れ去られた習俗の中に航海民のものと見られる蛇信封等の名残りが、ありのままの姿、又、隠し等の様式で、今日まで伝わっている。特に市内では、三会、杉谷、埋没しなかった市内の石造物（竜神、猿石、猿田彦、稻荷）に、その影響は顕著である。今日、島原地方では、神に仕える神職を「蛇トン」（シャーツン）と呼び、新緒師を「伯竜さん」と言っている。「寛政地変」の報告書を幕府に提出した、天野銀左衛門の資料によると、市内には、昔「高麗小路」「丹波小路」「タンコシュウエン」があったと記され、

「高麗小路」は、今日の水頭通り、「丹波小路」は中堀町、三勇堂附近と推定する。「丹波」とは中国古代の高位高官の意で、古代、中世を通じ、島原は、朝鮮、中国との深い関係にあったことが証明される。

## 2. 松島と大手浜(第2図-2)

古地図によると、大手浜の岬一帯は、南端か森立公園の高ノ山に続き、(現在金蔵山と高ノ山の間は切削され、その間に汐か山入りしている)島台地(印旛堀、現在島鉄バス駐車場)と延びて鹿島の尖端を抱くような地形であった。又、その一帯を「天ノ島」と呼んだとあるが、その地名は寛永15年切支丹乱後の命名ではなかったか、松島は大手浜の尖端、南端の海に舟形に横たわって、島と岬の間を、島原の浦と言っていた。

寛政地変のため、港は埋没して、地続きになり、陸地化して、往古の面影はすっかり失くなつた、松島の遺構は、資料や古地図によって、島の輪郭は、ほんと把握出来たと思うが、(地形変化図参照)未だ充分とはいえない。

完全な岡土作成は、後日にまつとして。

天野銀左衛門によると、松島は、西北端の弁天山が高く、西南、八天山、南端、川竹山と続いていた。今日では、高地は削りとられ、建物かたてこんて、昔をしのぶ面影はない。大師空(弁天町側)の坂道を登ると、右手、高台に弁財天の小祠がある。その一帯は旧宗像神社の神域である。今日、町名を弁天町というのも、この弁財天の由来に起因するものであらう。弁財天は島の高地に祭られる。(江の島弁天、浜名湖弁天島、琵琶湖生島)

弁天山には白骨が群棲していた。海岸は絶壁で、海水は深い、弁天山の周辺の稜線は、南東に続いて、(家政学校台地)それから、島原鉄道の創設者植木元太郎氏の別荘「船山荘」へと続く。その台地の尖端は、島鉄敷設の際、崩され、十砂の大半は、皆南地区造成地と化したという。島の南端、川竹山一帯は、高地の大半が削りとられており、そして、その台地には、妙見菩薩のお堂と、その脇に八大童王の碑が建っている。それから台地は、坂上、キチン山(浦田上)に連なり、西端は、八天山へ続いたと思われるが、現在はすっかり変貌して、複雑な町の様相を呈している。

森立公園の南端の高地に、「船山荘」という神社がある。この神社はもともと、松島の一角に鎮座までいたのではないか。

植木元太郎氏邸の「船山荘」の登り口に、「川能」と刻んだ雄渾な書体の巨石か、とっかり座っている。旧松島地区の町並の所々に「八大童王」の碑かひっそり建っているが、松島は縁したたる松を代役とした「神の宿る島 童の島み住む島」ではなかつたか。

## 3 島原教会について

有馬義貞の要請に基づき、ルイス、テ、アルメイタは、有馬氏を訪ね、安徳に立ち寄り、島原純茂を訪ねたのは、永禄六年(1563)のことである。純茂はキリスト教に対し、関心が強く、仏教徒の反抗の中にあって、アルメイタを手膺くもてなし、教会設立のため、敷地を与え、便宜を図ったのは、同年6月のことであった。その敷地と教会跡は、從来、弁天山一帯といわれ、すでに定説化している。

先般、出版された、フロイスの「日本史」九巻(中央公論社版)P80に、(註12)

「島原の町は、寛政4年のいわゆる「島原大変」の火山爆発によって大きく変わったが、寛政

地変前の島原の古地図か、島原に残っていて、「日本史」の二つの個所の表現、文意が明らかでないようと思われるか、地変前の古地図に比べるとよく合致し、教会の地所か、「現在の弁天山であることか、明白である」。

「即ち、昔の島原港内の城、東の北側から字状に岬と島が突出していたのである。弁天山は、島原純豊の居城、浜の城と相対して、島原港の一大美観を呈していた。弁天山は、市役所、南約七百米の地点にある。」と記され、教会跡の地所は、「現在の弁天山」であることが明白であると、松田毅一博士は断定されているが、

私は從来の弁天山説には不本意で、合点がいかない。松田博士訳「日本史」の問題個所を抽出すると、

「同じ年（永禄6年）6月7日、修道士は島原に帰った。彼らに教会を建てたための地所としての、その地に於ける最も良い一つを与えたか、そこは仏教徒たちがいる所から、遠く離れており、以前には城があった所で、（この時も）なお地名を留めていた。この場所は町外れにあって、しかも殆んど真ん中にいる。というのは、港は二つの半月形をしており、この地所は、真ん中の端にあって、殆んど海に閉まれているからである。」

さらに殿は、美しい材木で、この町の中央から殆んど教会の入口に達する橋を構築した。キリスト教徒は、満潮時、教会に行こうとすると、水の中を歩行せねばならなかったから。」

上記の文章を読んで、翻訳文として、外人特有の読みづらさはあるか、フロイスの島原の地形に対する認識は深い。

実に明細にして、正確をえた叙述文であると思われる。

從来、「浜の城」は、旧二小跡といわれているが、浜の城は、町の中央部、新木、風呂屋丁、御舟倉長屋一帯にかけて位置していたらしく、堀町は外塙の役目を果たしていたようだ。その外壁遺構らしい石垣か、海南庄、富重旅館の下通りの一角に、僅かに面影を残している。廻島の岬が町の中心点で、△状の尖端になるらしい。

當時、浜の城を中心にして、外城に、北は今中城（三会）、西は丸尾城（本光寺）、南は今村の砦であるから、当然、南は、海を越えて、大手浜の地続き、島山一帯に想定せねばならない。

「日本史」によると、教会の敷地は以前城があったところで、なお城の地名を留めていると記されている。又、島山には、地変前の古地図に「井櫓小屋」という城郭用語に關係のある地名が記載されている。「井櫓」とは、木材を横に、井桁に重ね合せ、隅部において、材を互いに組み合せた建築構造で、多分塔内、船の見張り等に使用された棟ではなかったか。しかも、その地所は、町から全くはなれて、周囲は高にかこまれ、町の真ん中に位置しているようだ。文中に「島」たとは、決して記されてない（弁天山は島）。島川一帯の地形に、そっくり条件が適合している。又古地図には「天ノ島」と記載があるが、前述の通り、この地名は教会設立後、呼び慣らされた地名であろう。

天とは「テウス」の意か、この島山一帯は、現在、旧専売局跡、島鉄バス駐車場から、金蔵山一帯までを比定する。

鷹島をはさんで、南側に白土川、北側に大手川が流れている。今日、鷹島の岸边に立つと、

潮時は沙が全く干いて、対岸まで歩いて渡れそうである。まして当時、白土川はなかった。橋は簡単な架けられたと思う。それに比べ、天野銀左衛門の報告によれば、弁天山は松島一の高い山、海岸線は絶壁をなし、その上、海水は深い。架橋すること自体、容易ではなかった。まして山一帯が宗像神社の神域である。

水保6年は、キリスト教が島原半島に入りこんだ初年の年で、フロイスの『日本史』にもあるように、仏教徒の抗争か火薬を切ろうとする情勢下、領主純茂は、みすみす争乱を引き起こす無暴さは考へなかつた旨。

又同時代の伊勢神宮文書に、神宮御使、島後三頭太夫の「肥前地方の貝那方(在地領主)」の記録がある。当時、島原半島の領主は、田主有馬氏にならって、一面ではキリスト教を尊び、又一面では伊勢神宮の大麻を受けて、多額の金子を寄進している。

その心情たるや、誠に複雑である。

私はこのような視点から、島原純茂が与えた教会の地所は、大千瀬地続き、片山一帯から、金藏山附近までと推定する。

#### 4. 遠見番所について

文化5年(1808)英國軍艦フェートン号の長崎入港に端を発し、その責を負い、松平因書守康英は自刃、弘化2年(1845)には、米国軍艦が通商を求めて譲賀に来航、俄かに諸外国との交渉がわからなくなったりして、幕府は、譲賀や、觀音崎に台場を築いた。そして、弘化4年(1847)又嘉永2年(1849)に、諸大名に令し、領内の海岸の地形や、防禦施設について、緊急報告をさせ、沿岸警備を厳重にし、砲術の訓練と、台場を構築させた。遠見番所や、台場の歴史は、江戸時代の末期頃で、歴史としては新しいが、わか長崎県の場合は、天領長崎港か、須田の窓口で、オランダや、中国との交易があつたりして、特殊な状況下にあつた。

南蛮交易明細記(吉川弘文館発行)における野田遠見番、ならびに、烽火山の条に、「寛永15年、鍋原兼弾守、馬場三郎左衛門が、長崎奉行の時、松平伊豆守か、2月島原帰陣の際、長崎に立ち寄り、港の要請を巡視した。外國船が入港の時、港の外から見届けて、報告をさせ、突然の米航の場合は烽火を擎け、舟戸まで、次々に合図をするための場所を検討し、野田崎から向中何の障害もなく、見通してあるから、遠見番を立て、疑わしい船を発見したら、直ちに長崎奉行に通報せた。

寛永18年(1641)に田島を設け、折に人港するオランダ船や、中國船に備え、長崎港入口の最奥部に当たる戸町(天領)と対岸、西泊(大村領)の両所に、それぞれ、戸町、西泊番所を置いた。この二つの番所を併せて、千人番所と呼んだ。千人近くの者が勤務していたことによる名前である。

金蔵山の遠見番所については、古田氏の報告にある通り、造営の基礎は古いか、石垣の組み方は、年代的に古くない。地震や台風の度修築されたものであろう。この遠見番所は、寛永15年以後、長崎の遠見番所と並行して、築造されたものと推定する。寛政の地変前の古地図に遠見番と

記載されているところから、他藩に比へると、その歴史は古い。

天野銀左衛門の記録によれば、寛政地変の際、「遠見番所流失」とあるか、恐らく基礎は、そのまま残って、地変後、その上に再び構築されたか、又は台場施設の附随と共に修復、改築されたものであろう。何れにしても、同じ基盤の上に何回となく、手が加えられたことは事実である。当該場所は、島原港の咽喉部に当たり、古代、中世を通して、港に出入する船舶の見張り、監視には格好の場所であった。この遠見番所には、3ヶ所の台場が附随して、第1台場は、田町海岸供養神附近、第2台場は、猛島神社前海浜ホテル附近、第3台場は、長浜明石旅館附近であった。

その一帯は、すっかり変貌して、台場の面影は全くない。今藏山の番所は、写真の通り、右角は3段組で、台上に登る通路も、はっきりして、全然破壊されていない。監視の場所は、有明海を真向にし、東南北か一望に見渡される台の前面部で、その背後は1段低くなっている。周辺部に基礎石か残っているのは建物の跡と思われる。3間・真ッ角の小舎と思われる、警備員の詣所か、又は各台場への指令所ではなかったか。?

北面の一角が破壊されているか、これは、戦後の頃、大阪東なる者か、埋蔵物発掘のため、掘削した跡とか、その場所以外は整然とした造構である。全国の遠見番所や台場か、宅地造成や、敷地のため、殆ど破壊されて姿を消したか、金蔵山遠見番所は、規模年代においても遠見番所として稀少価値があり、歴史的に意義があるので、その保存取扱いには、細心の配意と配慮が望ましいと思う。

(吉田安弘)

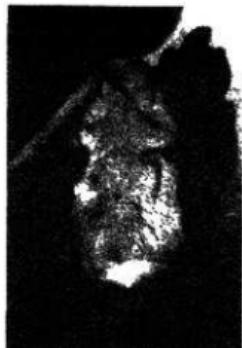
#### 参考図書

日本史 フロイス	9, 10巻	松田 繁一	中央公論社
日本城郭大系	17巻	長崎 幡	新人物往来社
新長崎年表	上		長崎文獻社
島原半島史	上下	林 錠古	
華夷交易明細記			古川弘文館
墮死の長崎奉行		戸部新十郎	新人物往来社
日本文化とその周辺		田分尚一博士記念論文	
築城の歴史			小字 韶
伊勢神宮文書			田代二頭太夫
寛政地変報告			天野銀左衛門
寛政地変前古地図			{八幡神社 蔭 中村貞義}

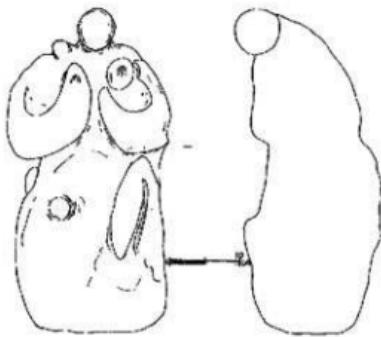
#### 6. 猿石 (島原の港所在資料の一つとして) 「第8, 第9図」

ここにいう猿石は、朝日全羅北道益山郡金馬面箕陽里剣守寺や、余良県明日香村欽明院附近で掘り出され、いま古備姫王陵に所在する。從来猿石と呼ばれてきたものの中でも、陽根を持つ猿形石像物との、類似性から呼ぶもので、製作年代の同時性とか、平行文化性から、あえて石像物を呼べはという意味ではない。

島原市<sup>1</sup>の猿石は、島原市片町（旧三会町）の新田農氏宅地内に祭られていたものを、袖木伸一、吉田安弘の両氏によって注意されたもので、約40年前、宅地造成時出土したものといわれ、寛政地変（寛政4年、1792、肩山の崩落陥没）にあって埋土したものらしく、石材は島原オニシヤクと呼ばれる、新期安山岩で、恐らく口<sup>2</sup>の前期頃の作と判断され、所在地の立地条件を考えれば大手川の下流域の附近、即ち今大手戸と呼ばれる地区の、近接したとこかに島原の浦（港）があつたとすれば、まさに港より山に向う入り口に当たる訳で、この類例は、有家町の石像物が目



第8図 島原猿石写真



第9図 島原猿石実測図

有家港を基点として、高岩山に向う登道筋に配置されている例があり<sup>3</sup>島原の浦の所在を知る資料として古くすへきてであろう。

この種のものは、対岸熊本県玉名郡木の奥に（現玉名市内）「木の葉旅」として伝えられており<sup>4</sup>、郷土玩具としては、和歌山県日吉山王瓦猿がある。雌猿形では、埼玉県北足立郡荒田村三ツ木山上様の石猿があり<sup>5</sup>、これらの石像は、益山や明日香のものと何ら変わるものではなく、異なるところは製作年代と背景文化の差である。ここでは猿石を論ずるものでないが、東南アジアに発生した生産文化の、伝播文化の一変形であるか、航海人によって持ちこまれた証として、港を基点として発生した、山岳信仰はここでも生き続け、その側面として語るものは、航海集團と港の関係で、大「戻道跡も、島原の浦との関連において考へるべき、示唆を与えるにはおかしいものであろう。

#### 註 解

38 石材の表面風化と作風を考慮して

39 有家町教育委員会「有家町内における文化財の分布調査」有家町の文化財報告第1集 S. 55-3

40 木彫て江戸期末まで譲付として作られていた。一名番の葉旅ともいいう

41 西岡秀雄「神社大成」 1966-11

42 発生の基盤は、海上における己の所在を知ることであったか、高山に神の存在を確信することによって常に神の視界の中にあって、その加護を得る信仰にあった。後には全く農耕生産信仰と結びつい

てしまう。

## 7. まとめ

本調査の概要是、述べたような経過と状況であった。発掘調査地は、原始、原史あるいは中世以前といった、遺跡、遺構、又は包含層といった生活面をみることはできず、（防波堤・通見番所跡は別として）地層形成時若干の産入物はあったか、遺跡地という現実性とは結びつかないもので、遺物についても略述した。然し問題点かくなかった訳でなく、地学的、防災学的、波浪工学的については、多くの教訓を含み、部分的には以前も指摘したか、今後この地住民の、生活との関わり合いの上で、深く考えなければならない問題である。

特に経済成長という魅惑的説を巧みに利用、土地の投機行為を画策し、更にこれに便乗して、土地造成を図る一部の人々のあることは、その結果いかなる災害の引き金となるかは、互いの必須認識である。

古代人の知恵と調査結果は、如矢にこの自然に対する現実対応と、歴史を、時間的空間をもつて教えてくれた。

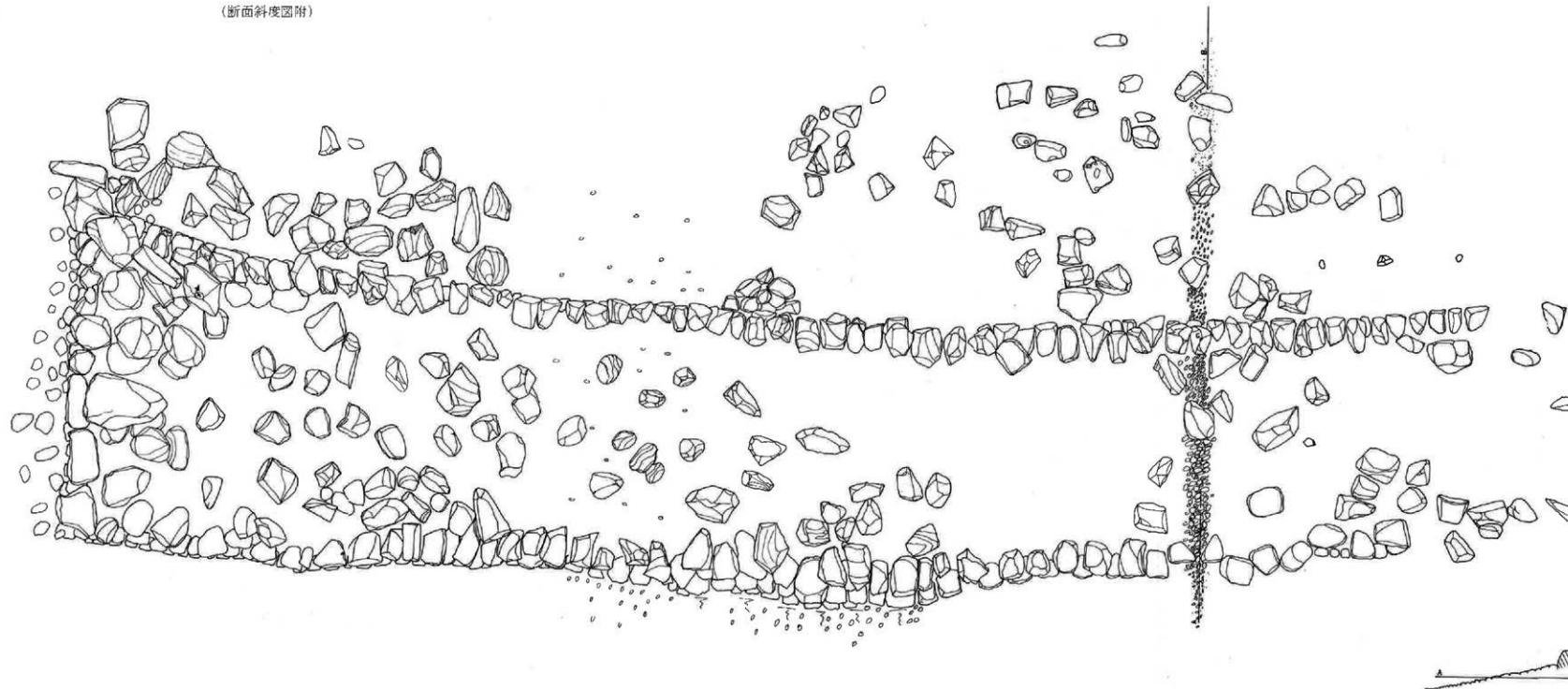
埋蔵文化財の調査の面では、期待した程の成果は得られなかつたか、この地には、歴史年代は降るとしても中世後半の防波堤、江戸期中葉以降の通見番所という、二つの遺構がある。行政はこの遺構から学びるもの、字問的、歴史的位置付け等、何等かの形で後世に伝える処置を、講じられることを期待したい。

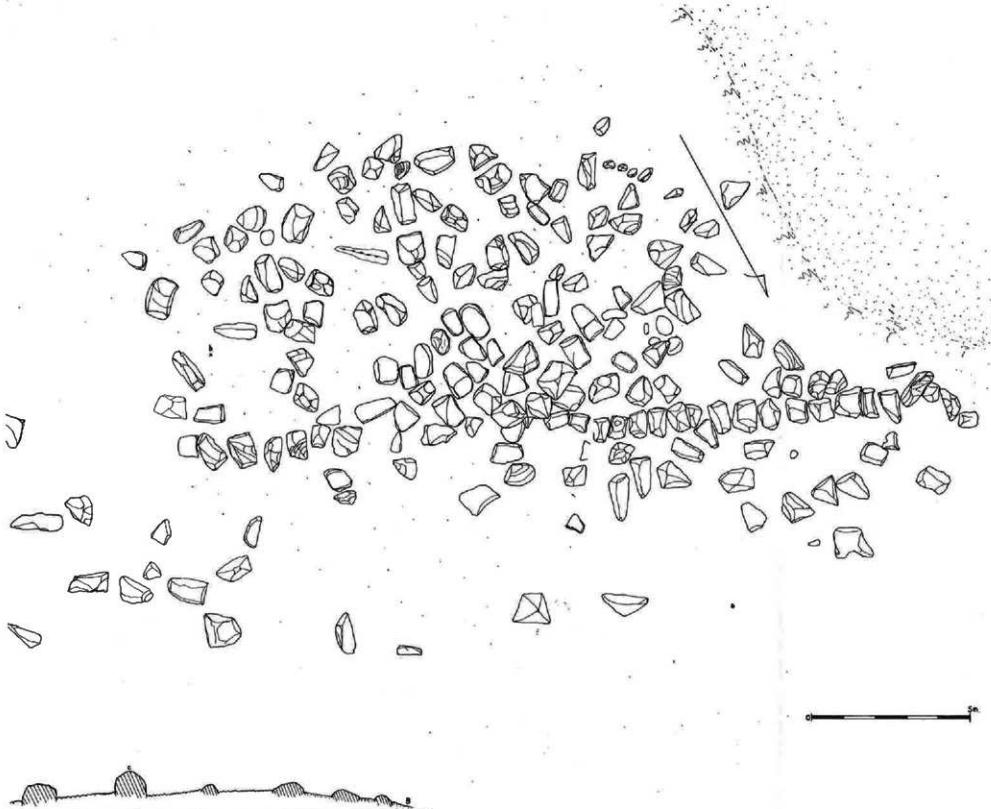


# 図 版

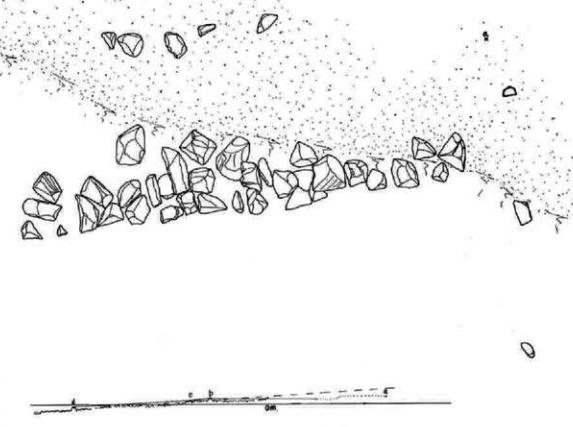


第1図 大手浜防波堤実測図（残存部）  
(断面斜度図附)





A ~ B 断面図



a ~ d 斜度図 ( a 点は 3 米)



第2図 金戸山南側残存石材実測図  
(A～B 断面図)

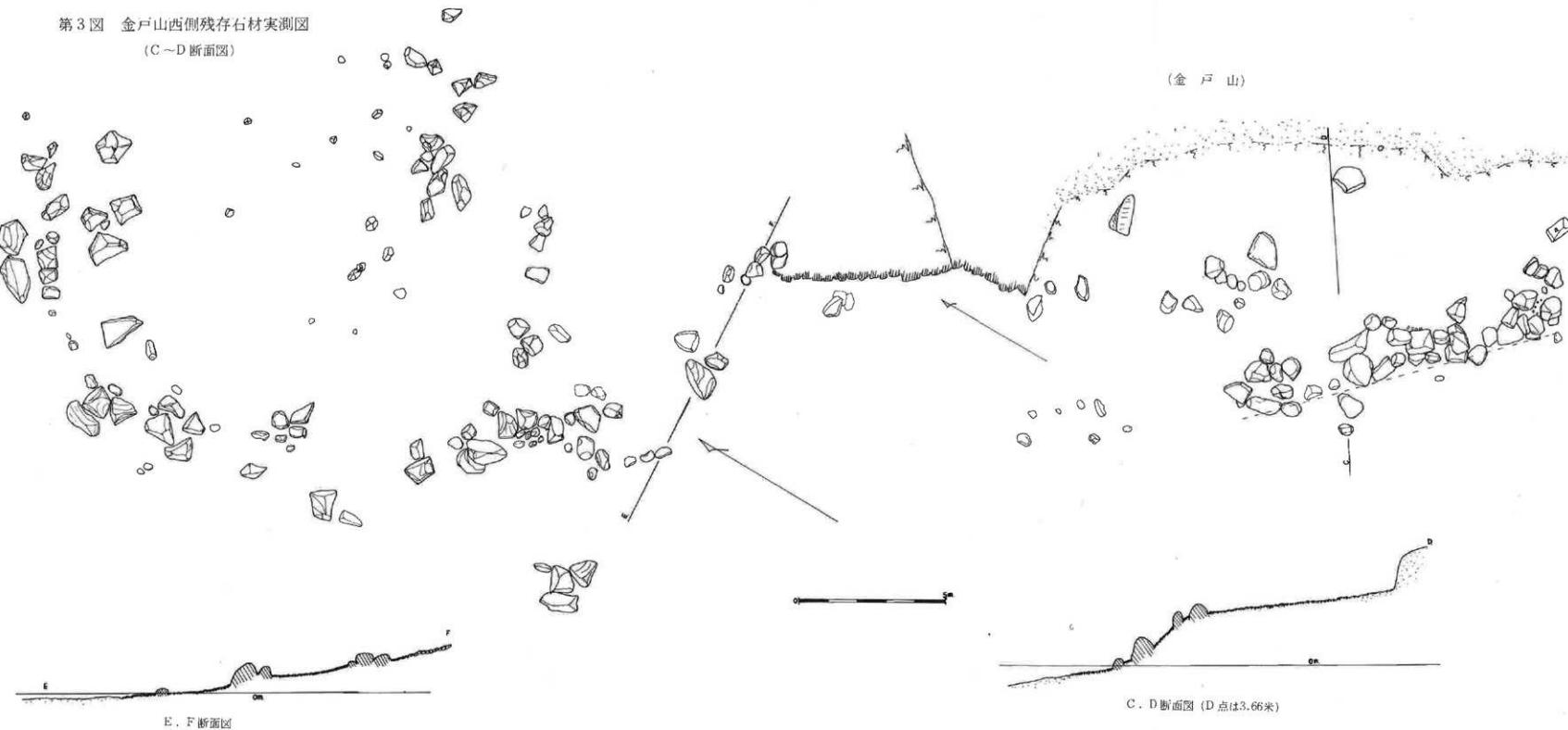
A . B 断面図 (B点: 4.60米)



第3図 金戸山西側残存石材実測図

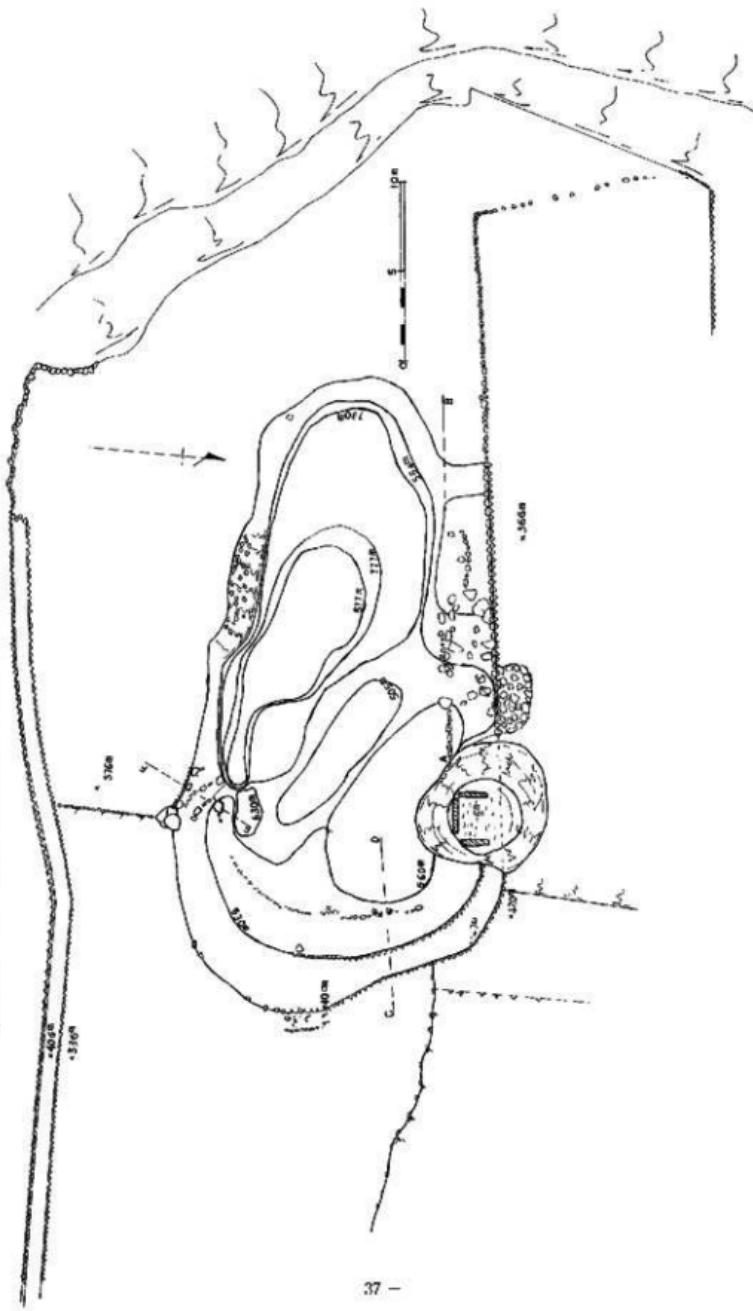
(C~D 断面図)

(金戸山)



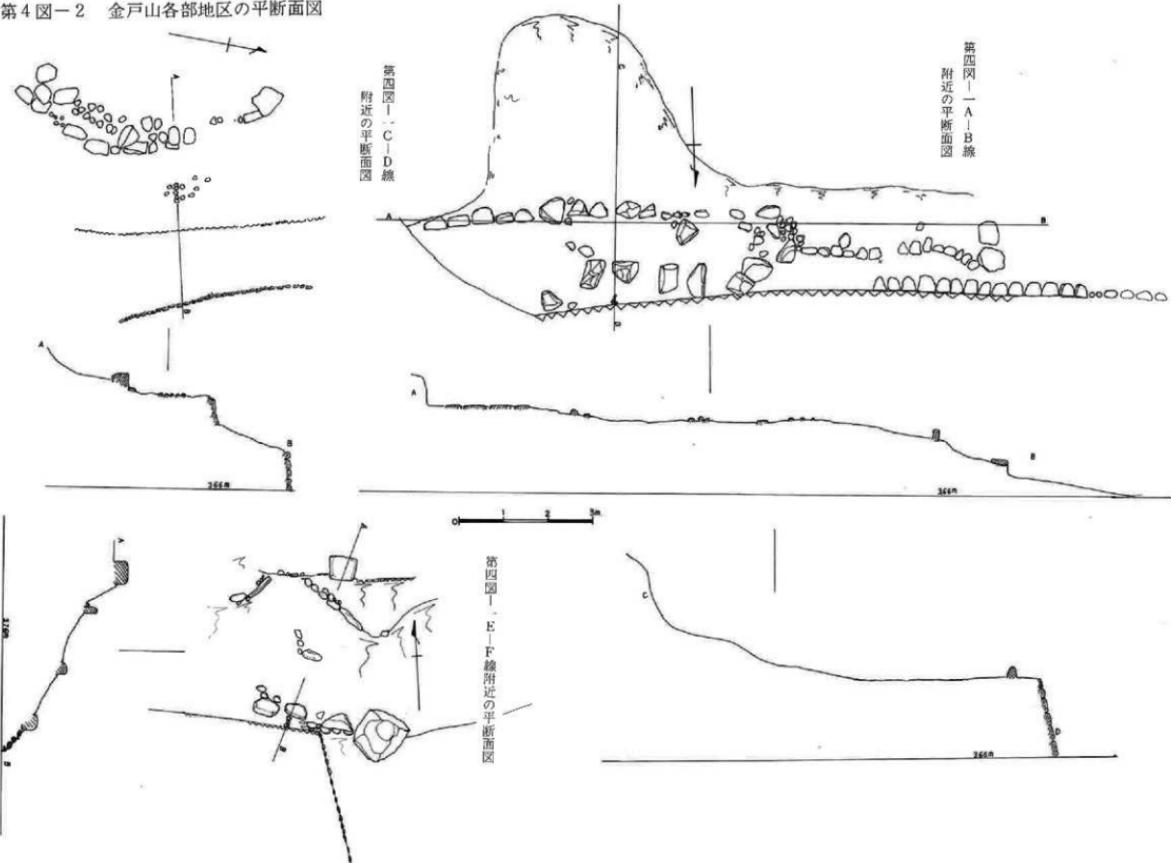


第4図-1 金戸山(金蔵山)実測図





第4図-2 金戸山各部地区的平断面図

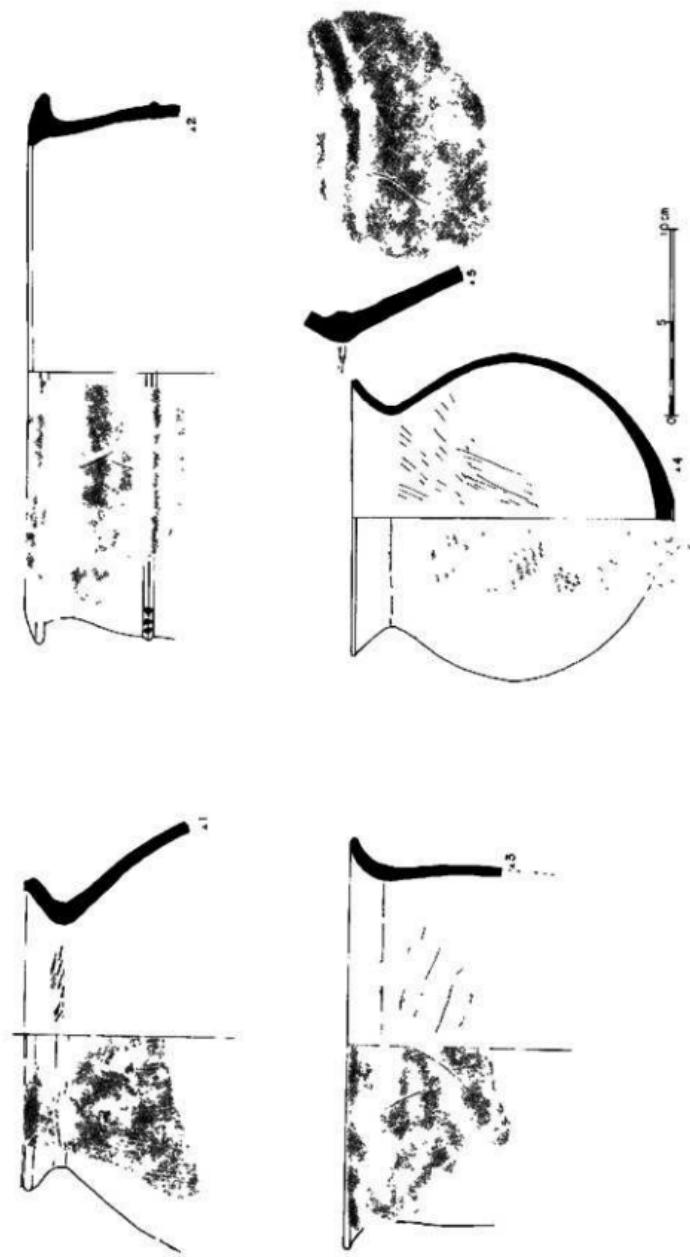




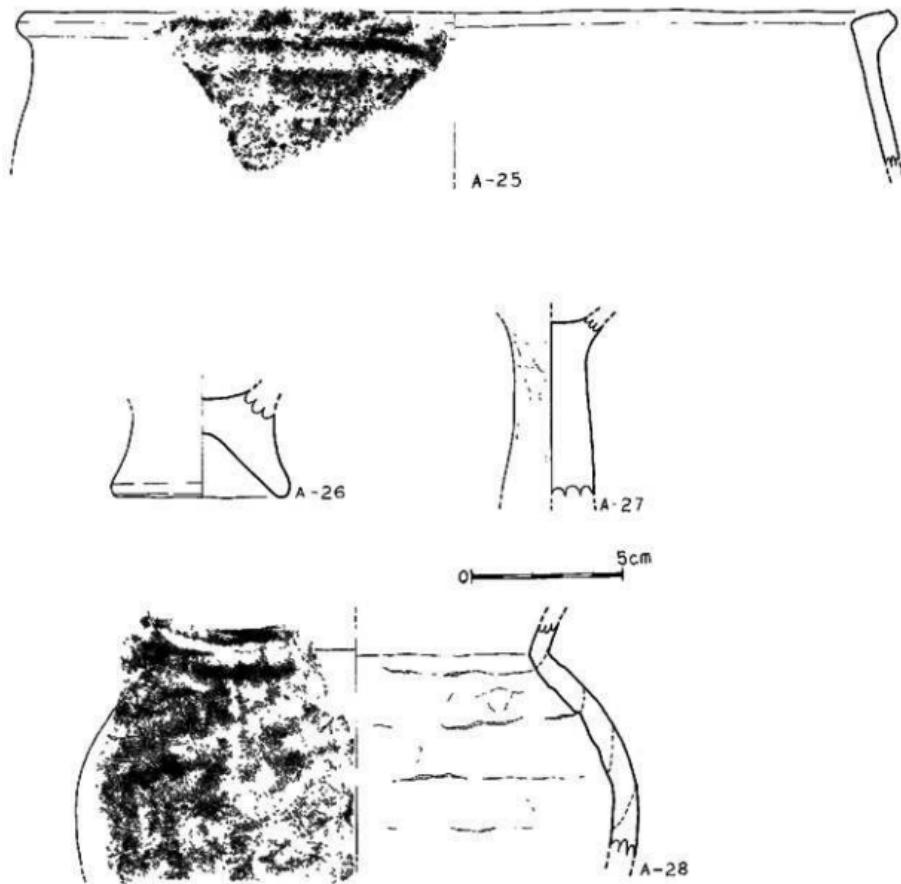
第4図-3 烏原市の地形変化図



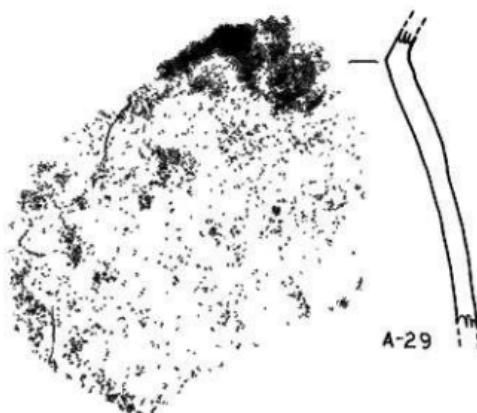
第5図 昭和31、32年採集土器実測図



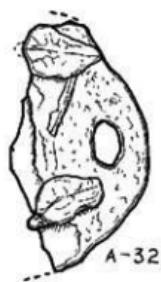
第6図 昭和31、32年採集土器実測図



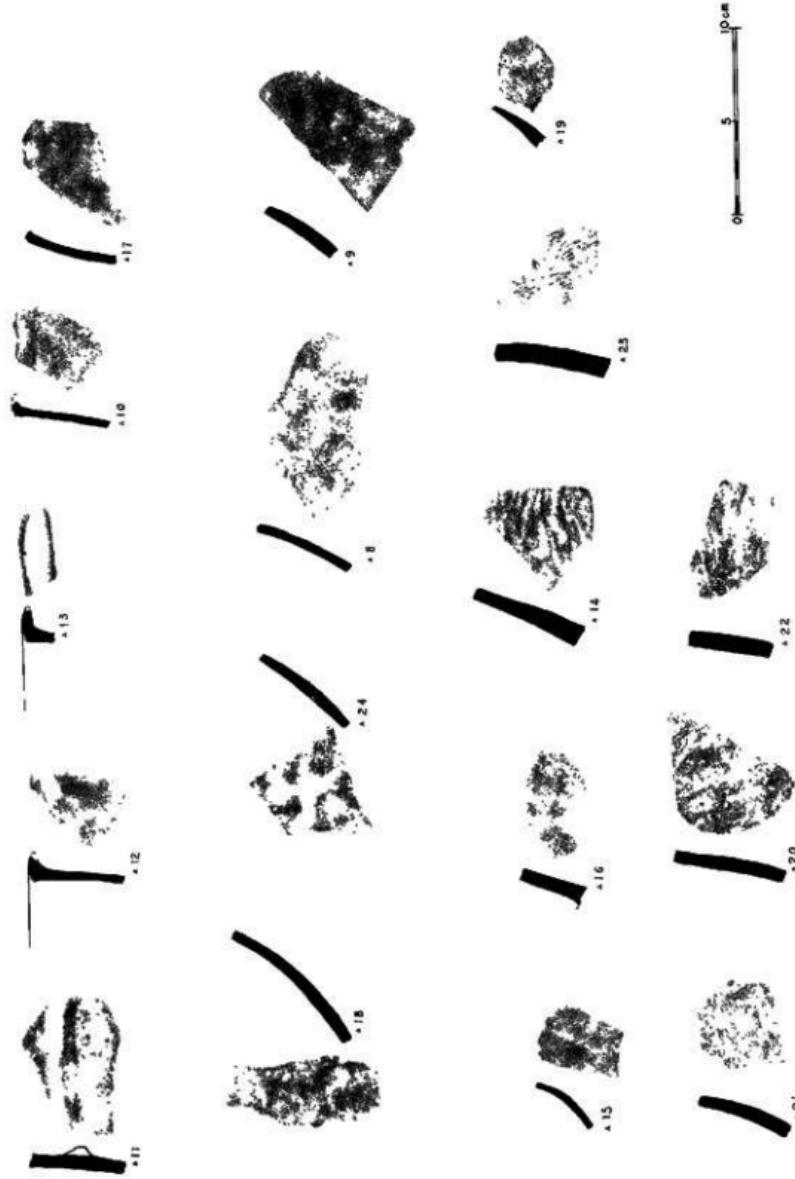
第7図 昭和31、32年採集遺物実測図



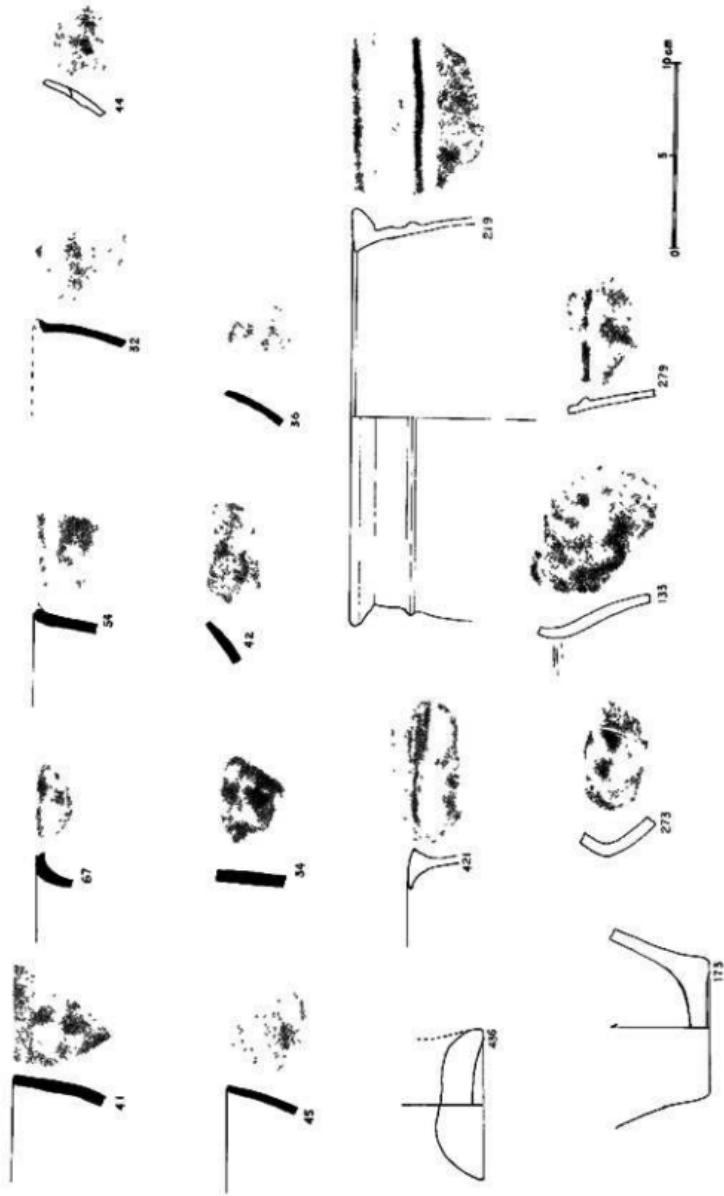
0 5cm



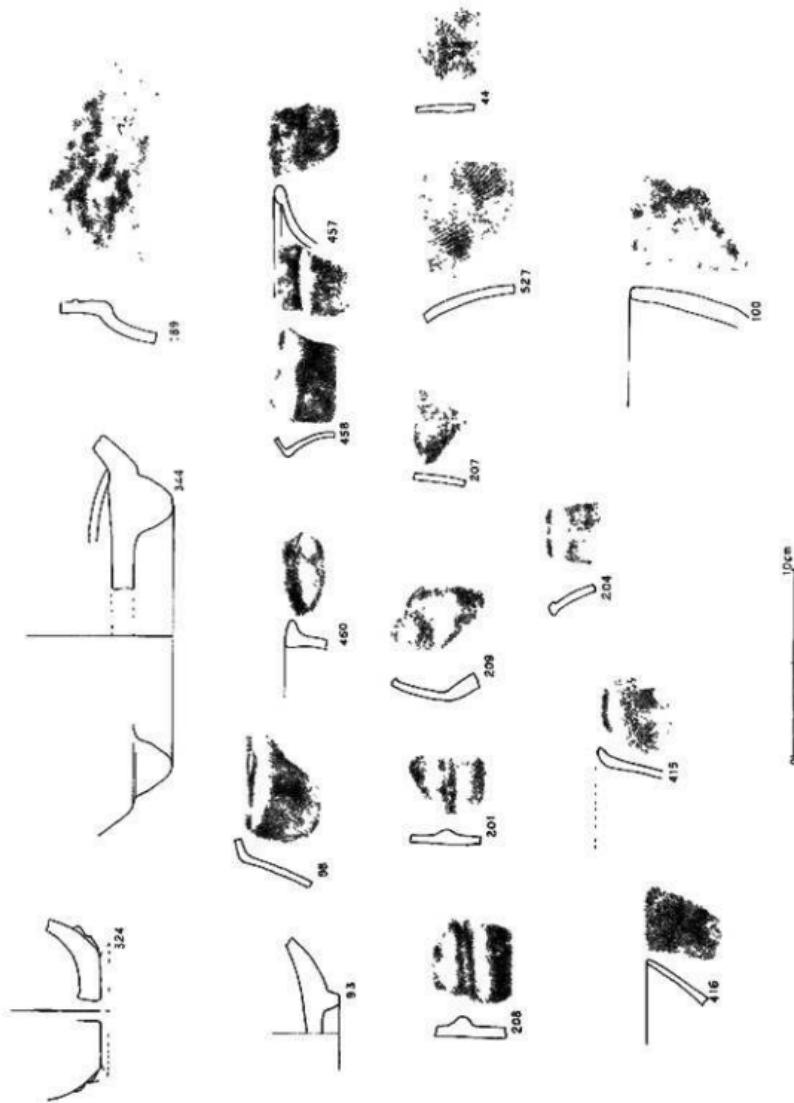
第8図 昭和31、32年採集土器実測図



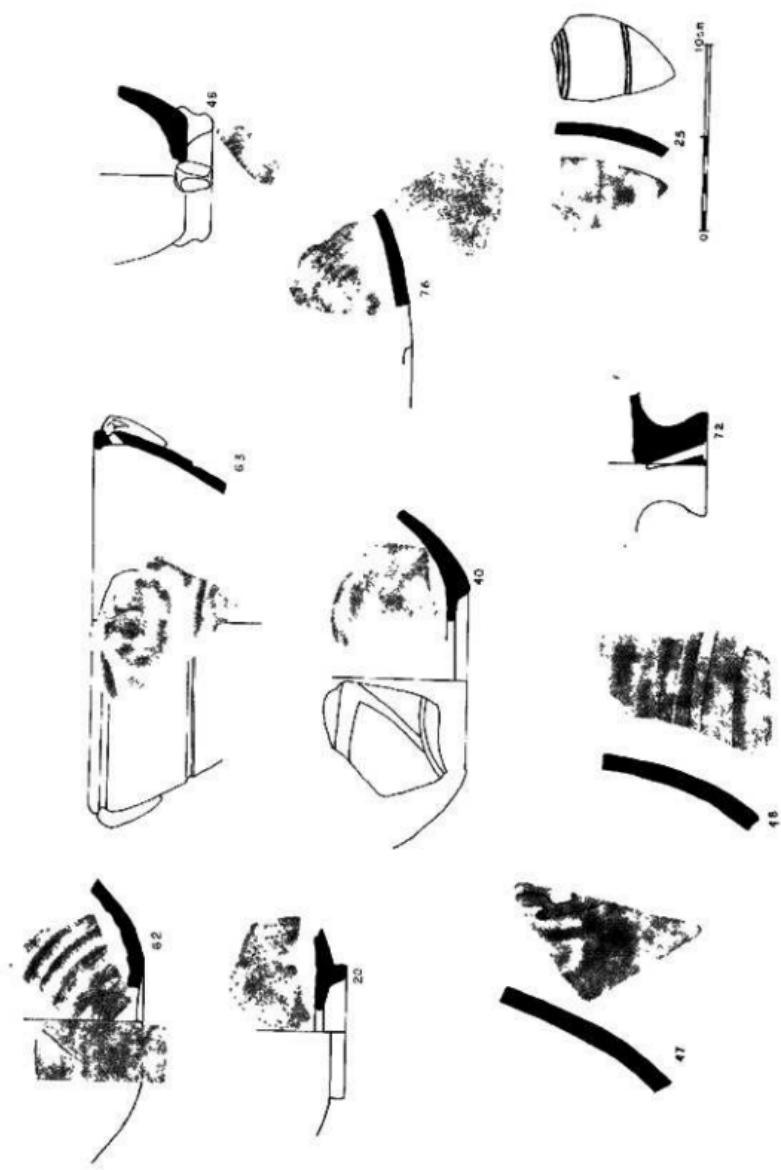
第9図 大手浜遺跡遺物実測図



第10図 大手浜遺跡遺物実測図



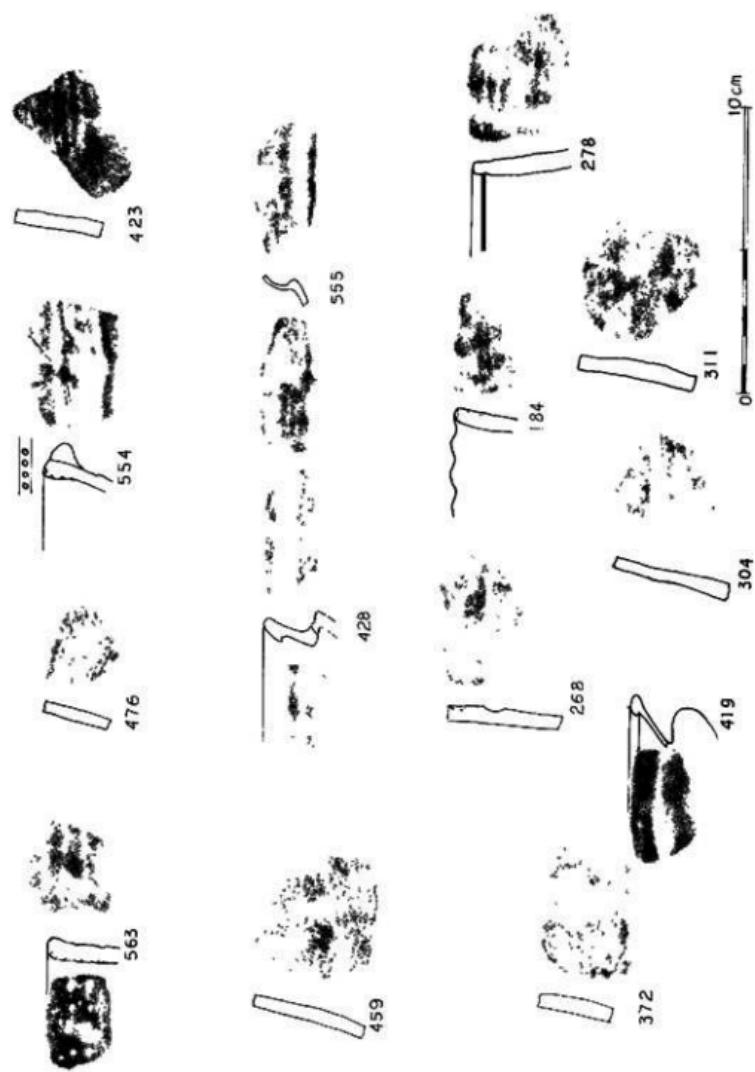
第11図 大手浜遺跡遺物実測図



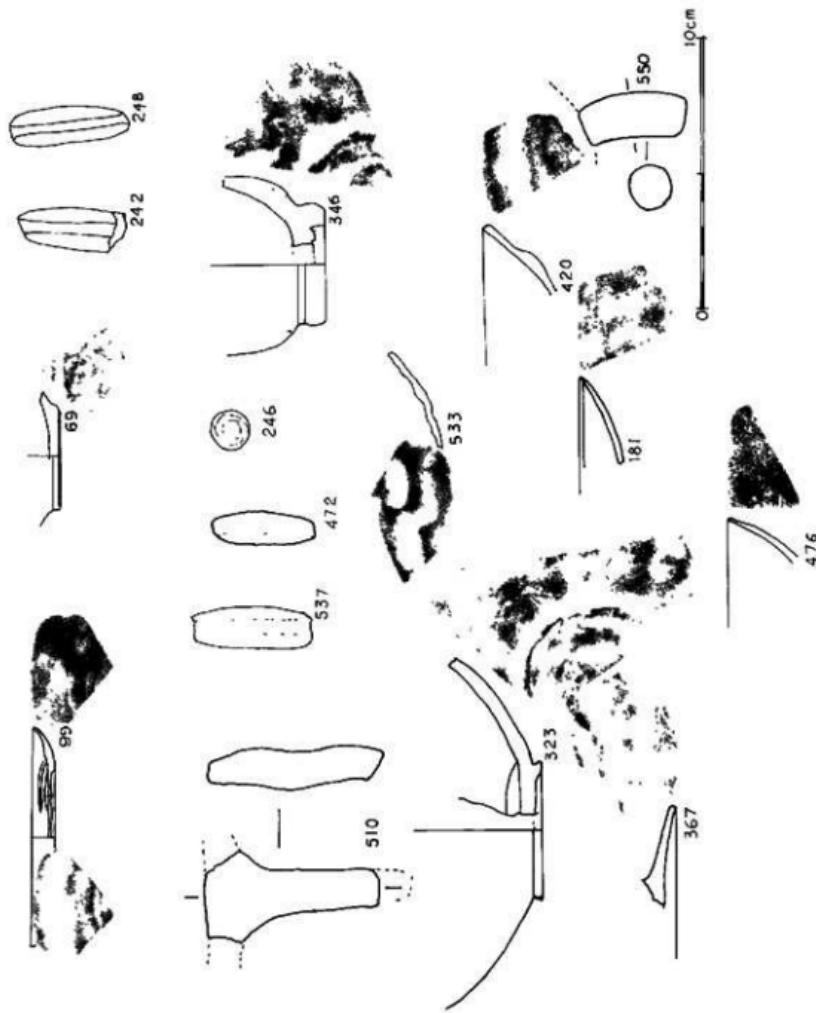
第12圖 大手浜遺跡遺物実測図



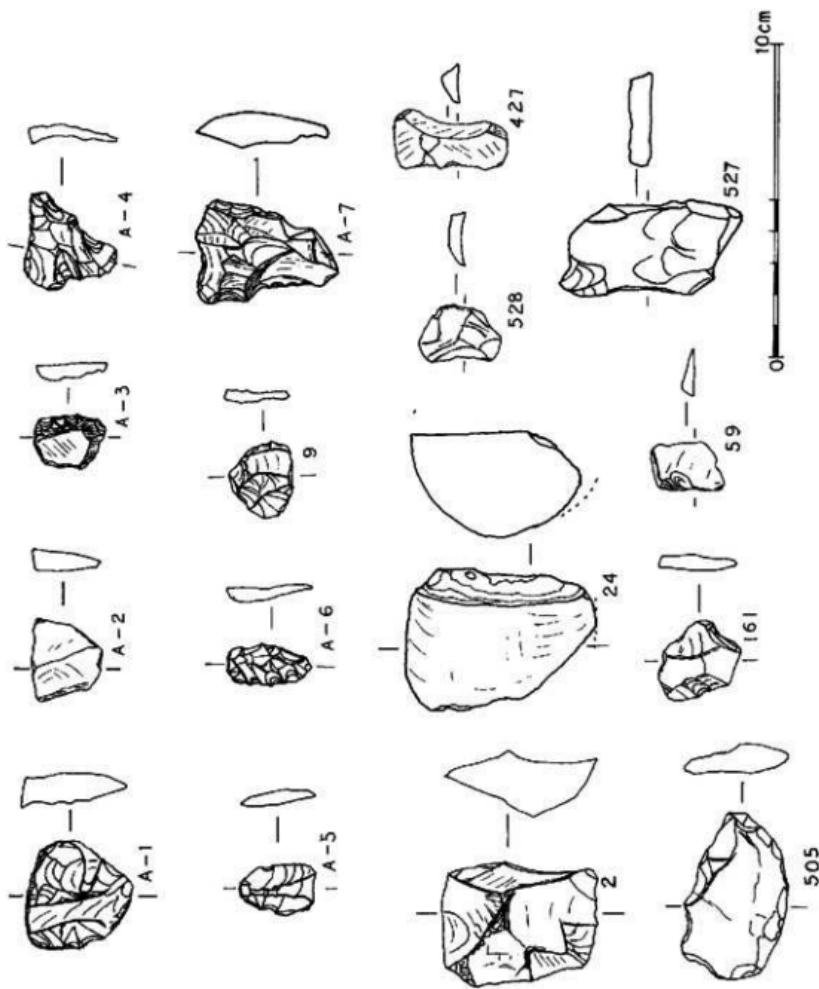
第13圖 大于浜遺跡遺物実測図



第14図 大手浜遺跡遺物実測図



第15圖 大手浜遺跡石器実測図



第16図 大手浜遺跡遺物実測図

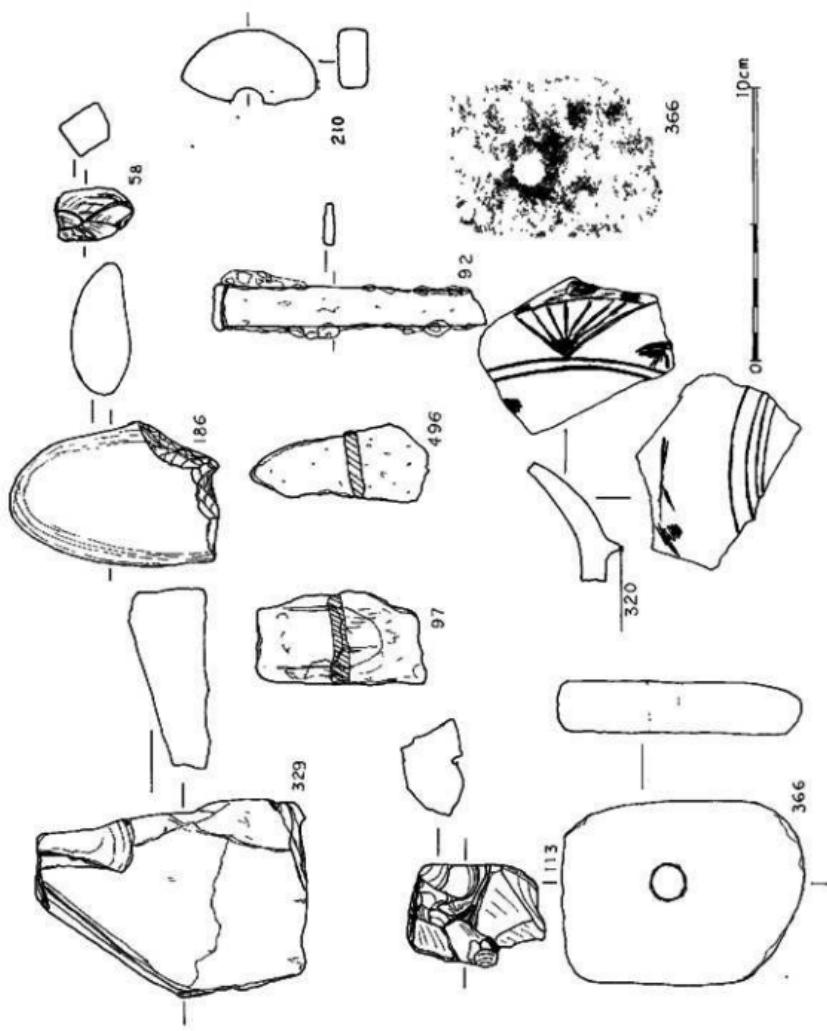
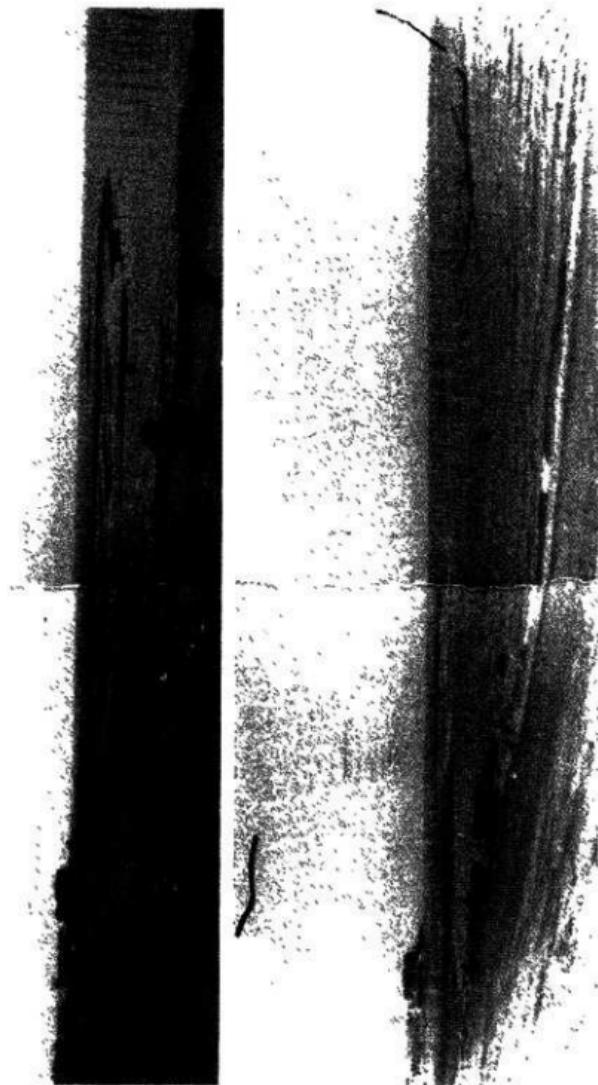




図 17 潟 大手浜海岸の冲縄(上)と、成瀬岬: 墓の(下)例  
(左) 上は手紙見つかるのであるか。奥見は標石 0.5m で、一部は沖縄は「が」となる。





上 遺跡地の敷設地区指定の立札



上 金戸島（片町新田より）



中 2よりみた金戸山



中 大潮時、トレンチに湖が入る（11-3）



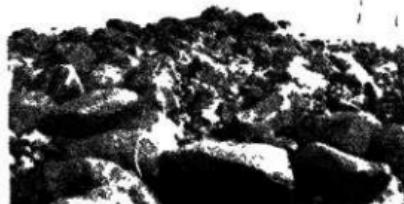
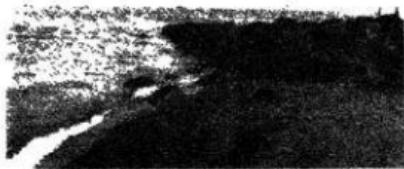
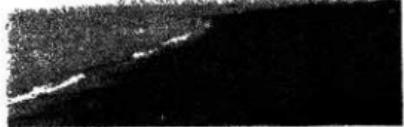
下 第1図8 丁魚見（ちくい）



下 大潮時、潮を受ける大丁浜遺跡

第18図

第19図

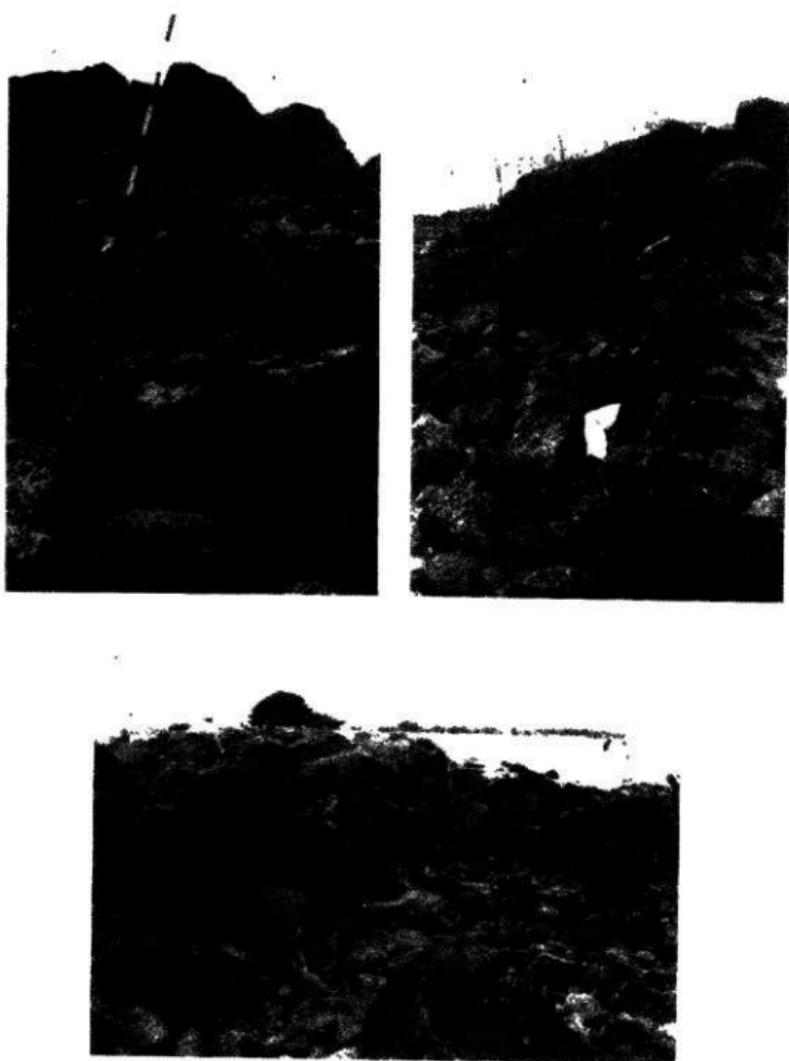


第 20 図

Ⅲ防波堤（西より東に向かって写す）

第 21 図

旧防波堤の状況（いずれも西から東に向かって写す）



第 22 図　山防波堤の状況（左は防波堤南側、右は北側、「上図はいずれも西から東に向かって！）  
下は北側「東より西に向かって！」



北側の捨石の状況



上 金戸山南側石垣の状況



同北側の基礎石の状況



中 金戸山西側石垣崩壊の状況



堤壁上の積石が除去された状況



下 金戸山南西側より対岸に橋があった  
といわれるその礎石とみられる状況

第 23 図 旧防波堤

第 24 図 金戸山景



上 金戸山東側の重石垣



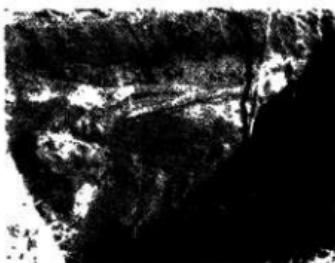
中 金戸山北側の登坂の状況



下 金戸山西南隅にみる積み上げの状況

第26図 トレンチ断面写真図

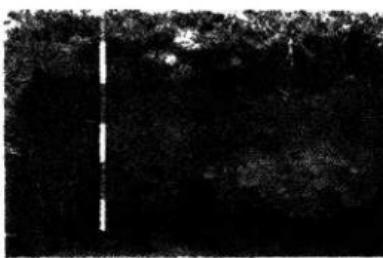
第26図-2



下 1 t - 9



1 t - 1 (e)



中 1 t - 7 (土錠、器の出土状況)



1 t - 5

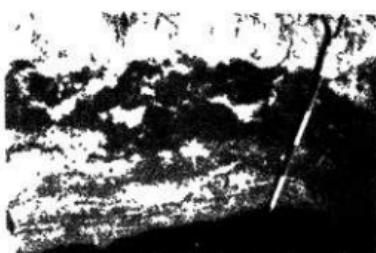


下 1 t - 8

第26図-3



第26図-4



上左 2t-10 (5層上部 瓦の出土)

上右 2t-13

下左 2t-8 (4層 磁器、陶器 6層) 瓦、陶器出土状況)

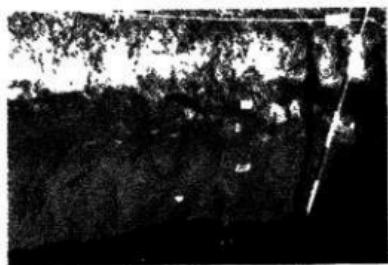
中 3t-2

下右 2t-4 (磁器出土状況)

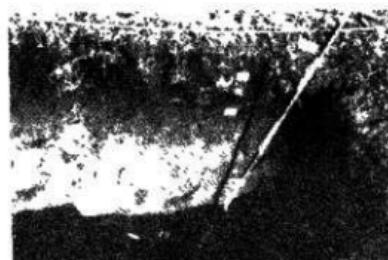
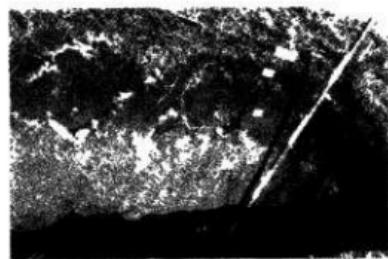
下 3t-5

下右 2t-7 (3層下青片と陶器の出土状況)

第26圖-5



第26圖-6



上 4 t - 1  
中 4 t - 3  
下 4 t - 4

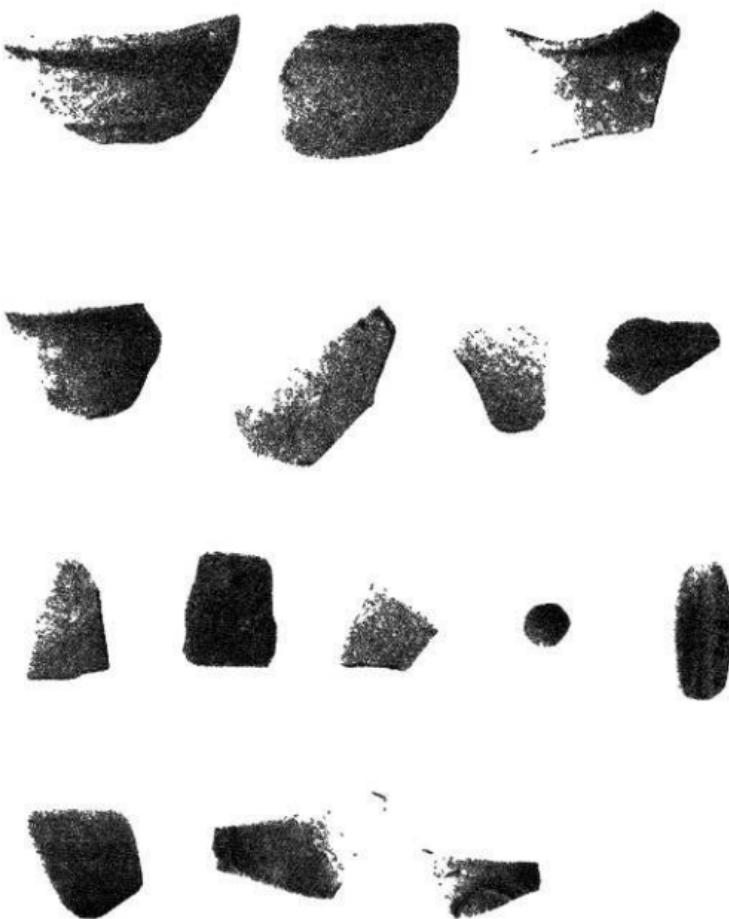
上 5 t - 2  
中 5 t - 4  
下 6 t

第27図-1



第27図 考古写真図

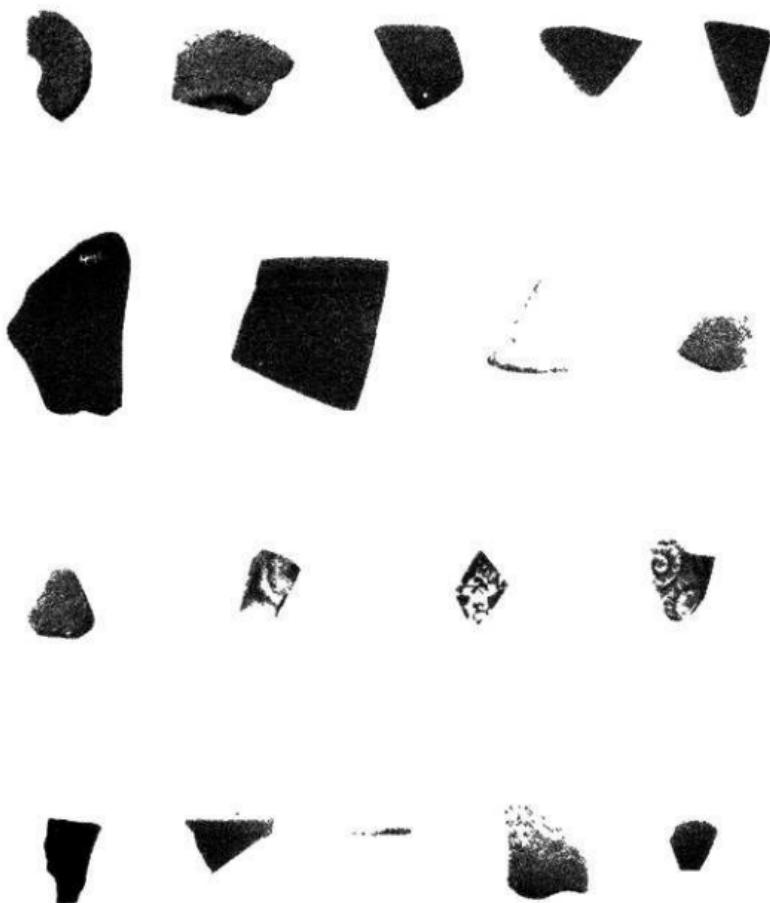
第27図-2





第27圖 4

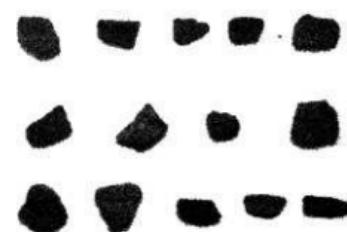


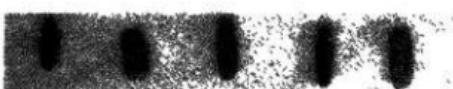


第27図-6

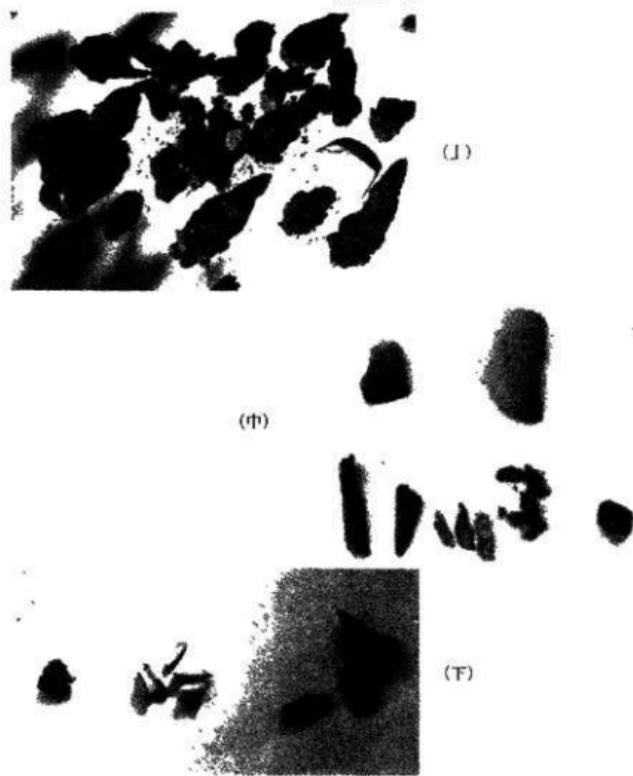


第27図-7

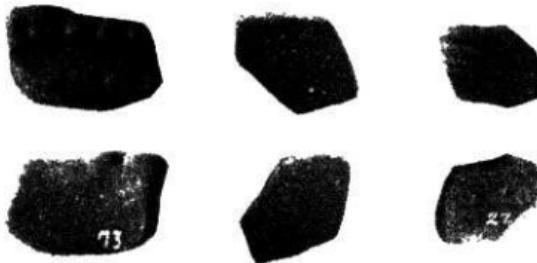


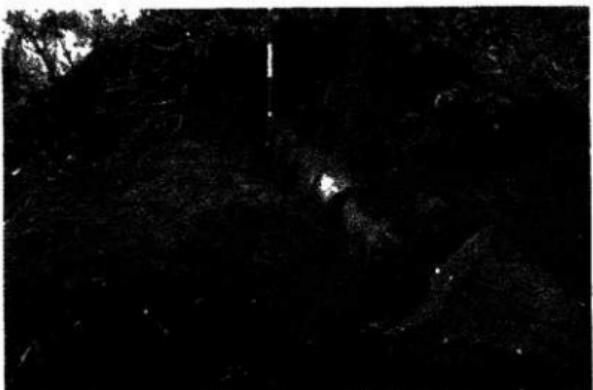


第27図-9



第27図-10 紋文土器表裏写真図 (左より73, 278, 27)





上 金戸山台上の地引石の状況



中 金戸山の登坂路



下 登坂路との踏跡



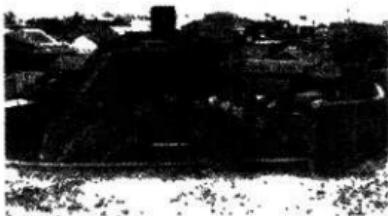
(1) 老竜園神社(新立公園)



(4) 八天山



(2) 水島の神



(5) 川竹山の八人龜王神



(3) 浜ノ城遺構の一部



(6) 植木元太郎氏邸跡から  
(浜島の周辺)



(7) 島原ノ浦



8 領 乌山一帶



(8) 茂神石碑（浜田医院内）



9-イ 蛇 信 仰（杉谷天高向）



(9) 丸天山



(10)-ロ 蛇 信 仰（福荷江）



---

---

島原市文化財調査報告書 第1集

大手浜遺跡調査報告

昭和56年3月31日

発行所 島原市上の町537番地  
島原市教育委員会

印刷所 凸版印刷株式会社

---

---

不許複製



